

二十四輩順拜圖會

山城
治江





彌陀如來從如來生して報應化種の
 の身成示現し結ぶるを崇め我安
 養淨土の教主大慈大悲彌陀實王五
 濁の凡夫成衆の吾宗祖
 親當聖人と化現し結ぶ其の

聖徳皇子と敬禮大慈阿彌陀佛と唱へて吾
 聖人を慕ひたまふを以て禮は

聖人廣大無量の大慈悲を垂てて世
 極重惡人五障三從の女人成り還りし
 長時永劫乃暗成のまじり三界六道の迷



此を離れ直に無量光明乃淨刹小生
を得せしめ給ふも實に佛智方便乃
證の處しを思ひ計るべき事こ
はあつた因縁よしまたしき入ひたじ越の
國にた遷りてして五とせの善報をさるるをせ
給ひに建曆のの力未のや

救免ありて都に當りたるや實に元來の
の化事とすませば都に遠き鄙の邦に
あつた人乃心もおろそかにして善因に縁
惡業を引連れ未來地獄に墮せざるを
憂

しび給ひてこの衆生は濟度せざる
間乃東を廻りし、愚智蒙昧の凡夫
女人は化益に任せし送り二十餘年
の御苦行を皆そ末世乃衆生、亦亦如
こは淺猿しきん愚乃輩をて極樂
世界に生れ得せしめ永く苦をのぞし
しめたまふと大慈悲

聖人の心なきは決流するに及男女老幼
誰れこれをも救はるる教、是を感嘆せざ
らんをい

聖人の蹟を示し、殊に靈場及び此の弟子
二十四輩乃寺院を巡り拜りて是
祖師乃廣恩にばはたしめをら報ひまら
んや遠く國にわたりて界を越て訪ふ
て廻るぞ何れにうらまをまどそや大海中
の一滴にやあまのこころの善
書肆某矣道が庵にありて

聖人乃御齋跡二十四輩の来由故書
記せのよし讀して出次五言を唯跡乃
稱名をらるるよびあるもの外流ふ鳥の

あつたもとの筆に物さふするをさし
えりて志らぬしは此書に書はる人の心
迹の廣はた甘しなり信心の余り此
旧跡を巡り拜せし心やまに視る文なりは
詞花言葉のよきものなりと云
の需より記して移す所ありぬる年の善利
事て再び閱すは都六條の

本山とありて國々の寺院御齋の跡を細
圖に記し二十四輩順拜圖會と表題せる
抄りてしまりて目録あるん地のぬき書

ついでに聖人御業のよふなるをたゞ
之野しきしと

聖人の御行状におきける尊くも有難く
うごは涙ふむせびもあやま我巻の首
かひはき侍る時を喜みおこりのし
矣の者閏月六旬

釋 了貞自序

凡例

一此書に載るる高祖聖人御經廻り御舊跡二十四輩
の寺院をまじし其餘國に於ても貞宗の寺院數
千區ありて或る高位或る高僧或る由緒ある貴院
或る謂はれ大地等多しとて聖人御旧跡に
る寺院に除きし此に記せむ

一聖人由緒ある舊跡に於ては大地小地を論せむ悉く
是を記し其外古院の廢したる或る他宗の寺院に
は神社及び在家野山丘塚に至るまで聖人の縁ある
古蹟に於ては詳し正し記し多漏とす
一御舊跡二十四輩の寺院に各々根本の別院ありて
より其地と名づく相續せるあり又兵乱火災等

係^レ他^ニ國^ニ他^ニ郡^ニ遷^ルる^レ所^ニ或^ハ二^ヶ院^ニ三^ヶ寺^ト別^トと
本^末分^明か^ラず^シあり^是其^寺院^ノ縁^起を^記と
中^ニ然^ル其^傳束^を顯^別に

一 此書^ニ載^ル寺^院住^職ノ位^階高^下と^記す^其所^ニ
謂^ハ當^時位^階ノ依^き後^年昇^進して^高後^ニ至^ス
る^所只^院家^職一^宗ノ極^官に^ハ皆^是を^寺
号^ノ下^ニ記^セり^又東^西ノ

御^奉山^ニ屬^セる^寺院^ト曰^ク寺^号ノ下^ニ東^流
西^流と^記して^{これ}と^別に

一 六^老僧^七箇^ノ靈^寺あり^是又^其寺^院ノ下^ニ委^記と
一 御^舊跡^{二十四}輩^ノ寺^院順^拜ノ次^第より^毎行^程と
記^とす^も其^順路^一を^記した^人が^誠後^ハ信^濃と^巡

あり^又出^羽と^經く^奥州^ニ巡^るあり^皆其^所を^看て^是
を^辨説^以且^各諸^ノ順^路あり^下向^ニ拜^とる^旧跡^何り^一
一 國^ノ内^とも^往返^兩度^拜禮^とる^所あり^此編^國と
分^テ寺^院を^記と^故に^國中^ノ御^旧跡^ニ於^テ往^返兩^度共
ニ^係せ^し縁^起と^記し^里敷^と寺^号と^其順^路の^再
出^ル毎^巡拜^ノ便^とせ^り山^城國^ニ於^テも^山科^ノ旧^地
ハ^降路^ニ係^スば^里敷^と記^スる^所あり

一 先^ニ遺^德法^論集^御旧^跡二十四^輩記^大谷^遺跡^録と
又^{二十四}輩^順拜^記 各^諸記^御旧^跡圖^彙を^皆其^靈場
ノ^傳記^として^巡拜^ノ便^とる^書あり^とす^も是^レ長^キ
其^ノ後^ニ短^ク著^スる^所あり^後又^今先^書ノ^載る
所^と皆^集一^國字^信大^猶加^る圖^画を^以て^之を^畫に^載す

婦女の祝安うんがゐかり
 一編中御舊跡のあゆみなる名不同系を記し又圖画と
 し係せのせうし是予が著述する所なりけり只兒童婦
 女の觀るに真らうなると書肆の利と討る計を
 るがしあつてなごし是をりて此書を廣むるの補
 かるが是又いこうこの方便なりと其儘よ本
 壽以

河州 專教寺 隱 釋了貞識

二十四輩順拜圖會卷之壹

目錄

- | | | | | | | | | | |
|------|------|--------|-----|------|-------|-------|------|------|------|
| 山城之部 | 東本願寺 | 佛光寺 | 先圓寺 | 虎石之圖 | 西大谷 | 智恩院之圖 | 植髮堂 | 北山御坊 | 近江之部 |
| 山城之部 | 西本願寺 | 源海上人之傳 | 六角堂 | 桂御坊 | 東大谷 | 丸山安養寺 | 圖崎御坊 | | |
| | 興正寺 | 大泉寺 | 法泉寺 | 月輪寺 | 吉水御舊跡 | 栗田御所 | 新美谷 | | |

南山明神鳥居南山明神鳥居
 蓮如上人湖回跡蓮如上人湖回跡
 永福寺永福寺
湖水 equal 湖の國
志望の置
 稱福寺稱福寺
二十日觀之廣
 宝滿寺宝滿寺
 錦織寺錦織寺
 比叡山大乘院比叡山大乘院
 西流御坊西流御坊
 比叡山南谷無動寺比叡山南谷無動寺
 超專寺超專寺
向叡明神の社
作生也
 廣濟寺廣濟寺
湖水各石
河州の各跡
 山科御舊地山科御舊地
 東流御坊東流御坊
山王御池の注
聖徳の湖
 願教寺願教寺
院東の園
樹林の園
 西方寺西方寺
二十日觀之廣
 近松寺御坊近松寺御坊

以上

題 宗祖聖蹟圖首

有三畫師能寫我 祖山及其他聖蹟二
 十餘所罄無不盡焉於是觀之者忽驚
 恢廓之廣而莊嚴亦愜素聞每人不言
 嗚呼殊勝哉所謂千聞不如一見者豈
 不重圖之功乎乃人觀之則亦庶乎
 起信念恩之一助云爾

享和癸亥春二月 玉泉洞水撰



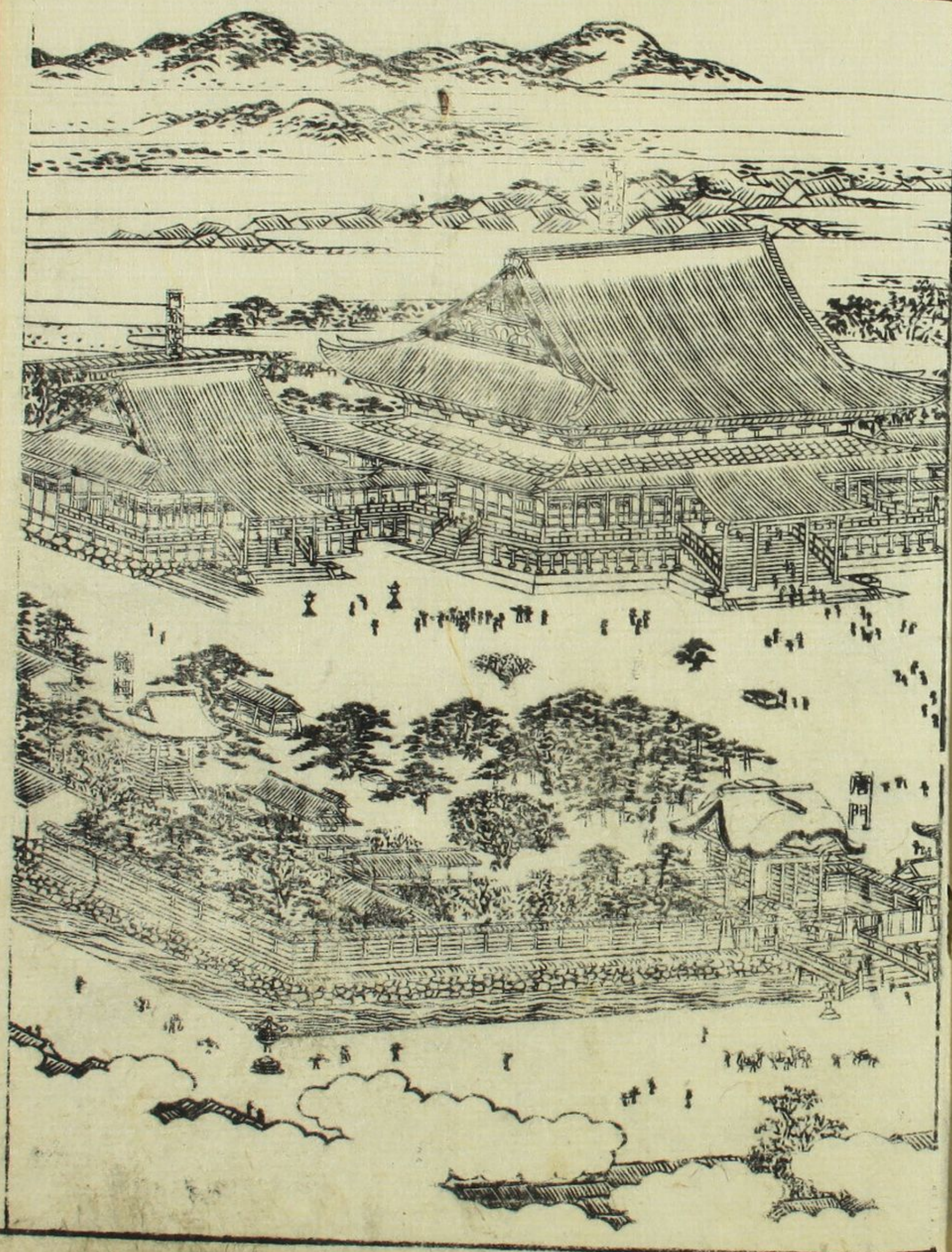
弘化五年申二月十日 同行

八人御大 門御供 會美良 御奇 櫛行六 丈八尺 梁行 四丈二 尺五寸



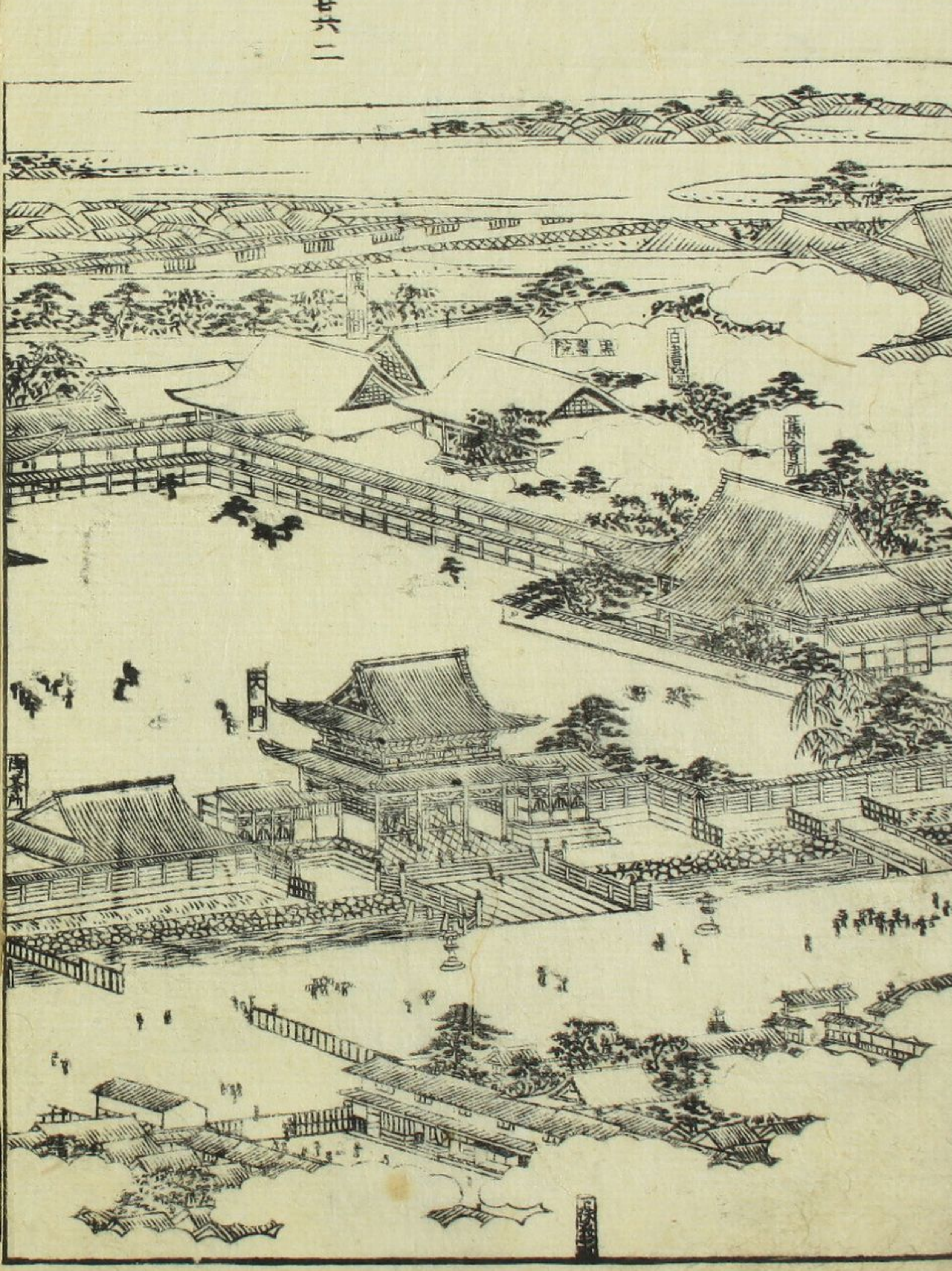
東六條
本願寺御門跡御堂

御儀後
 御儀
 大
 皇
 御
 殿
 御
 近
 宮
 影
 御
 之
 真

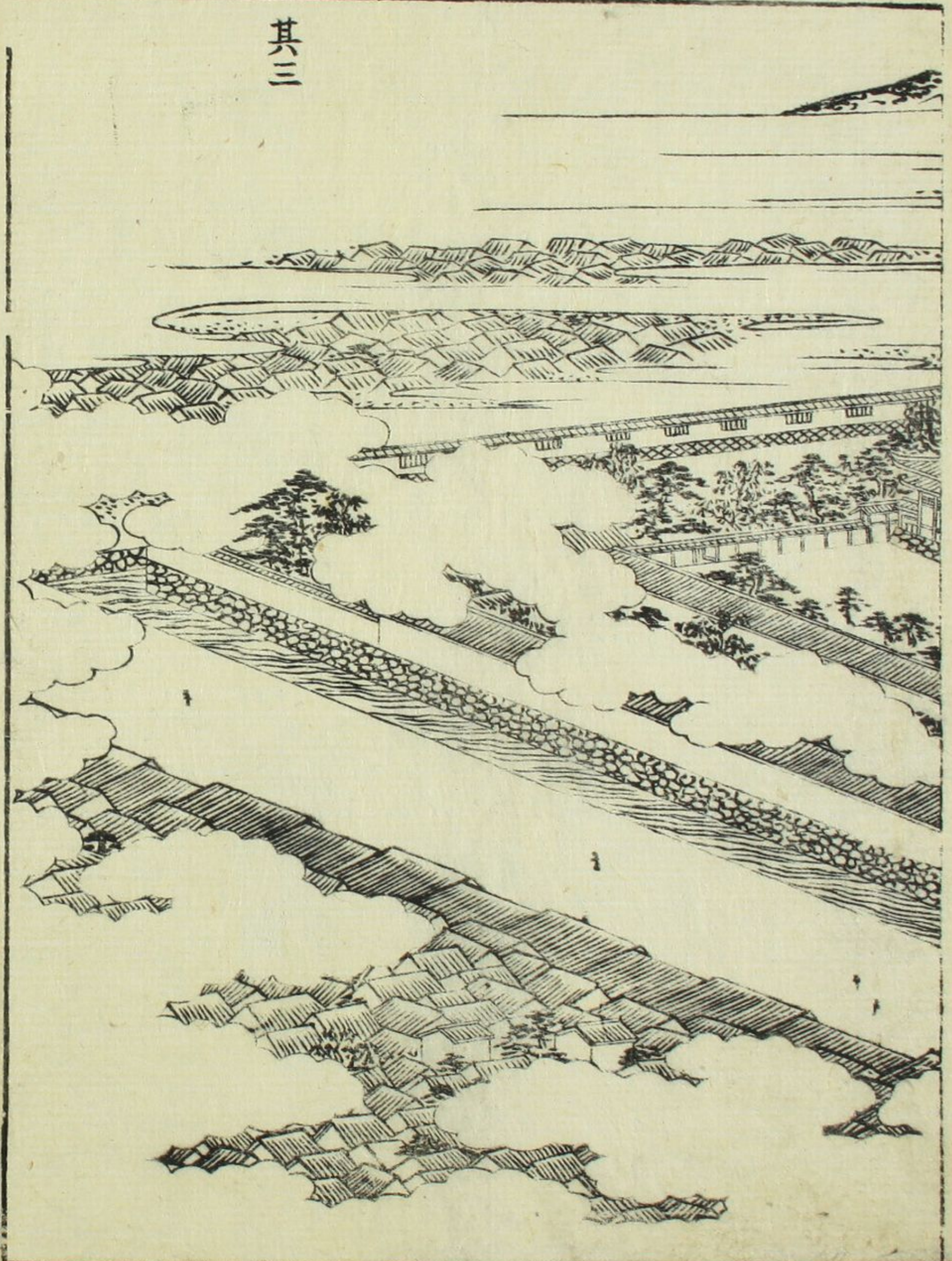


高
 九
 寸
 東
 都
 二
 代
 軍
 將
 秀
 忠
 公
 御
 奇
 附
 高
 祖
 聖
 人

廿六二



人同系 之滿葵 御布施 御直影 儀之 夜六 條殿 壽貴 院樣 大僧正 眾如 上人 新御
 門主 現如 上人 西御殿 御真 影樣 九條殿 前関 矣臣 尚忠 樣 中納言 中將道



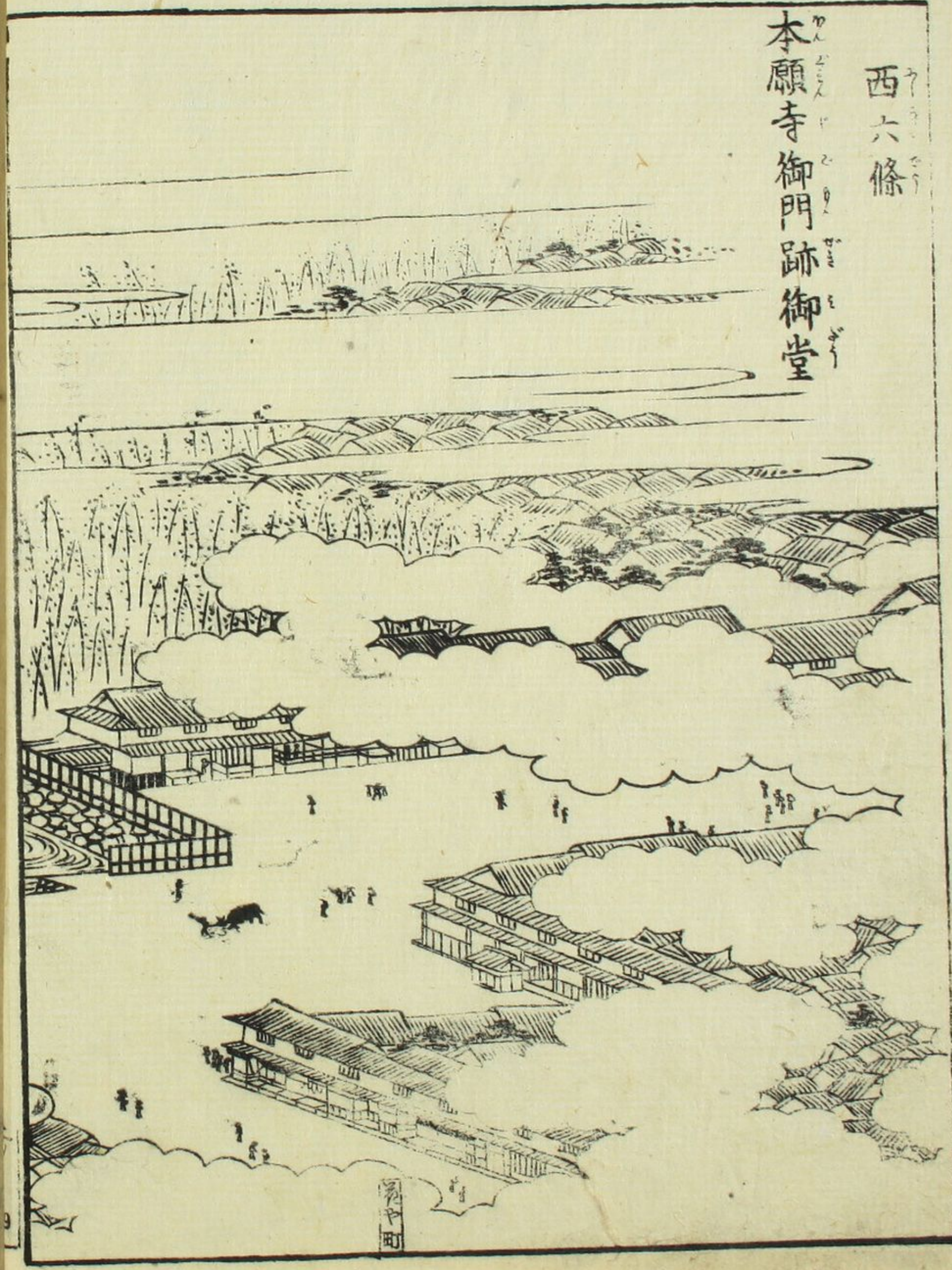
易行大道以廣開進
 止同塵絕去才遺第
 感恩尋事蹟忘機
 鳥雀面西來

越翁

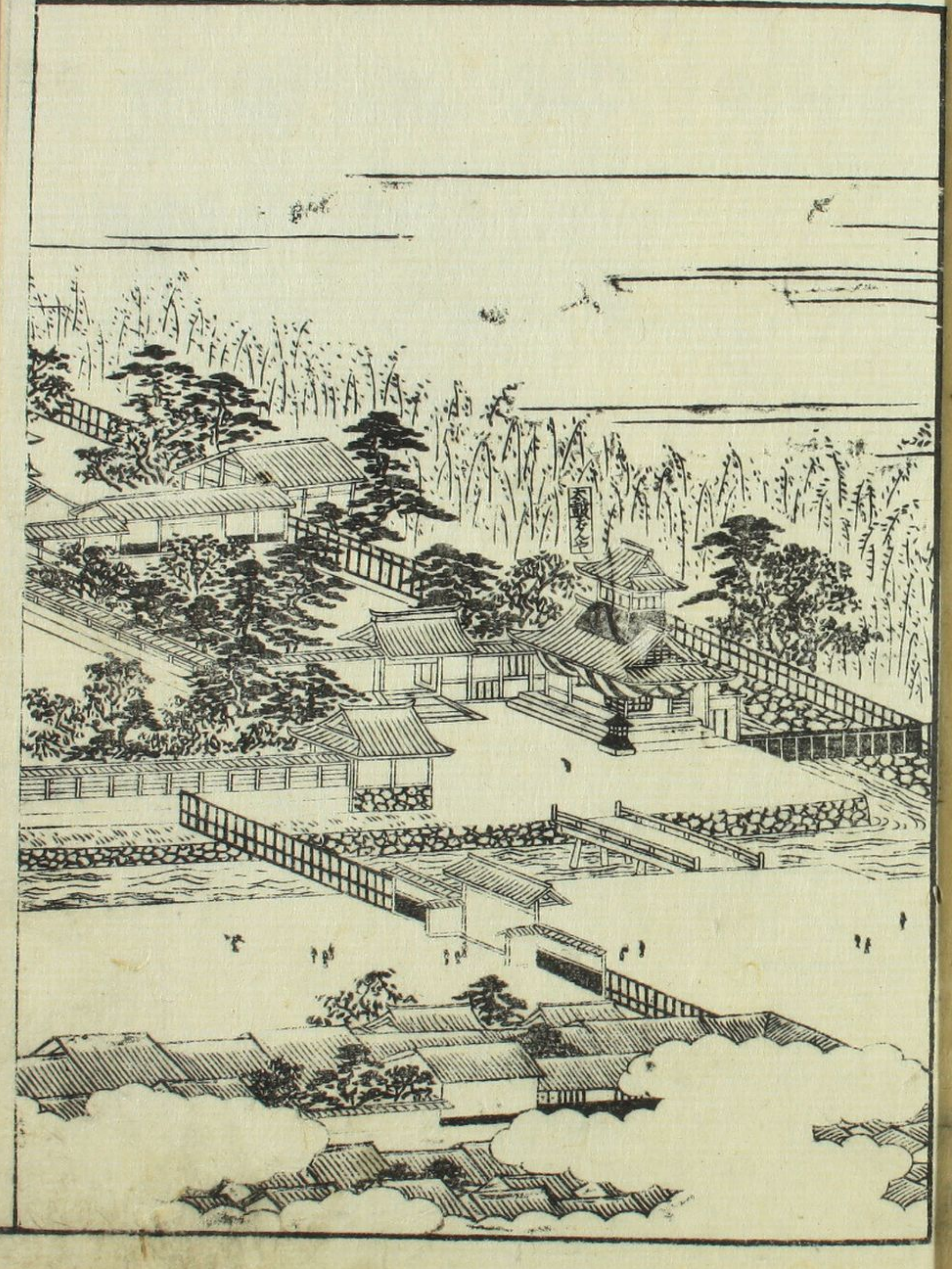


孝卿 様 御真 影 様 御布 施 御奇 附之 御家 門 主 御使 諸大 衆

西六條
本願寺御門跡御堂

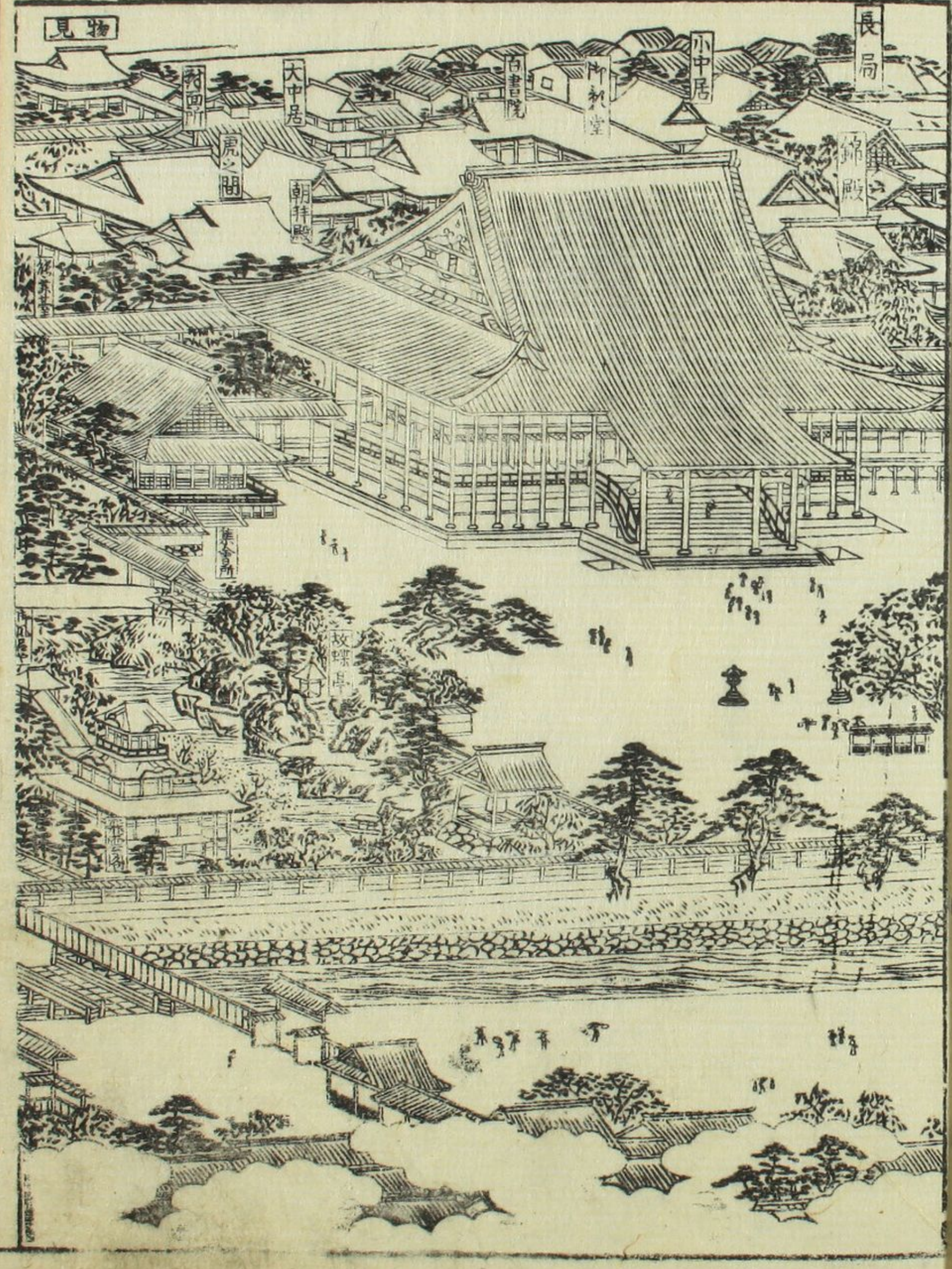
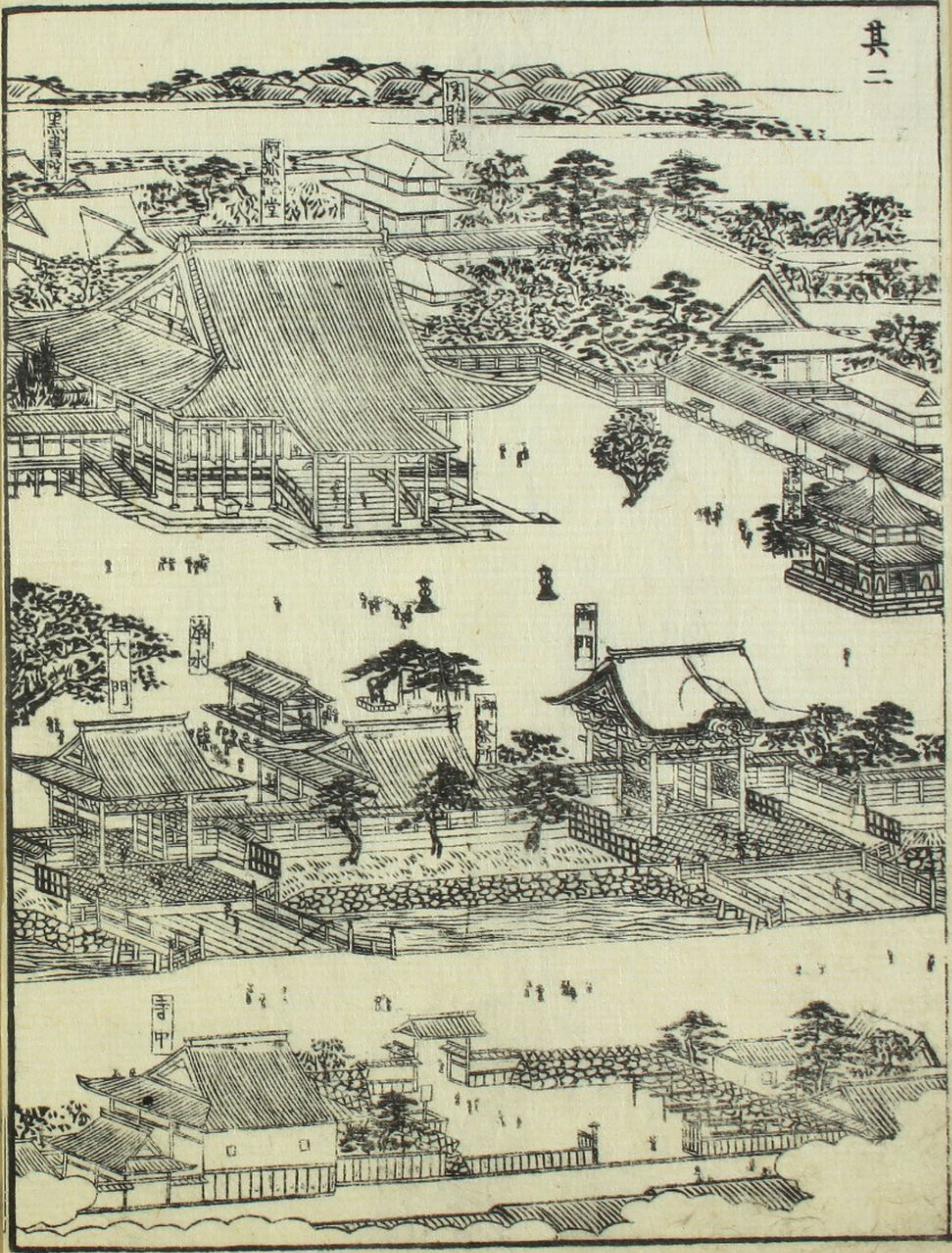


所司代 松平 女将 若狭 守奇 御真 影 様 御布 施 公儀 上使 御真 影 様



御奇
御布施
御奇

其二



見物

長局

小中居

所執堂

白書院

大中居

虎之間

利四

集會所

校場

聖書院

園遊殿

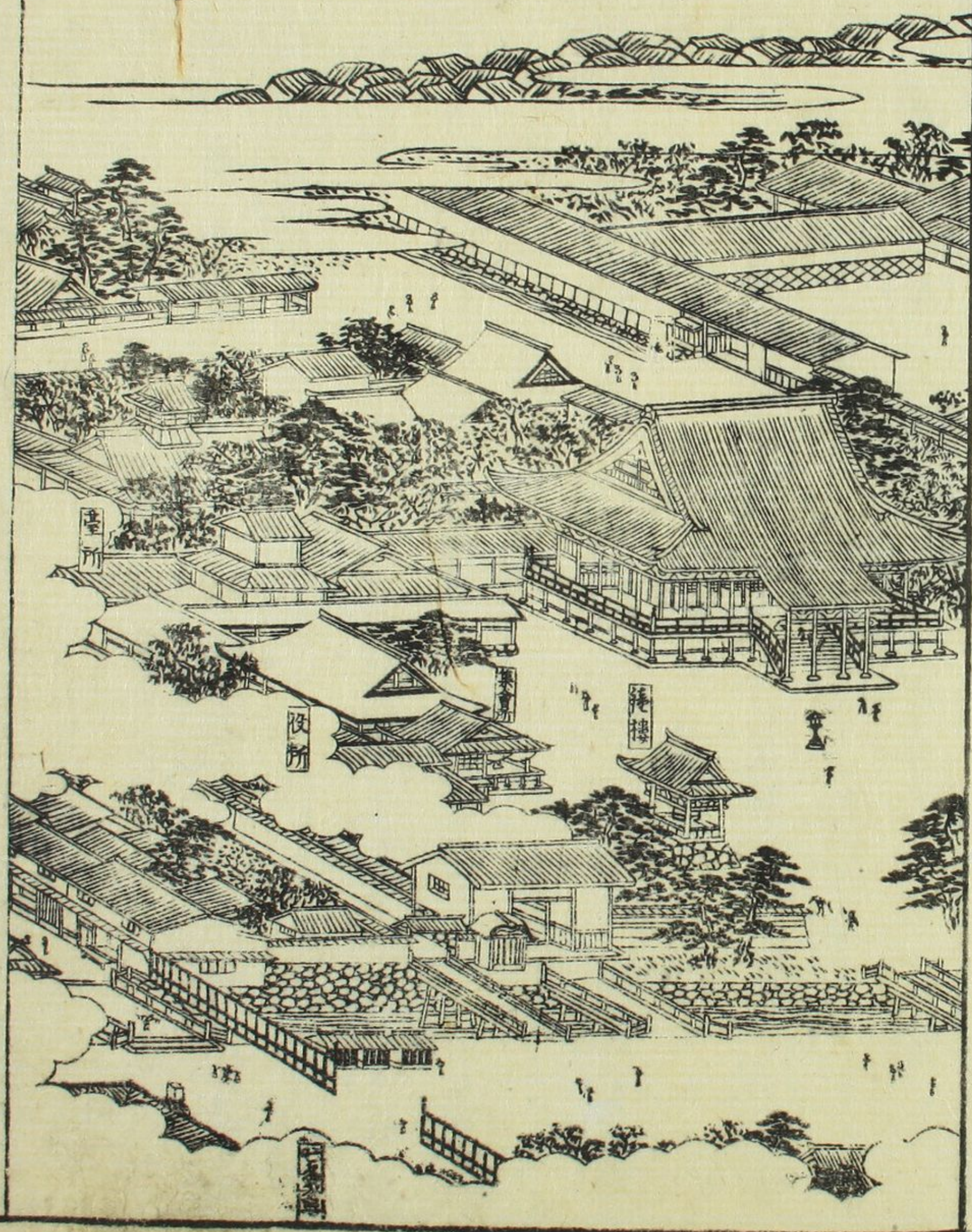
御書堂

大門

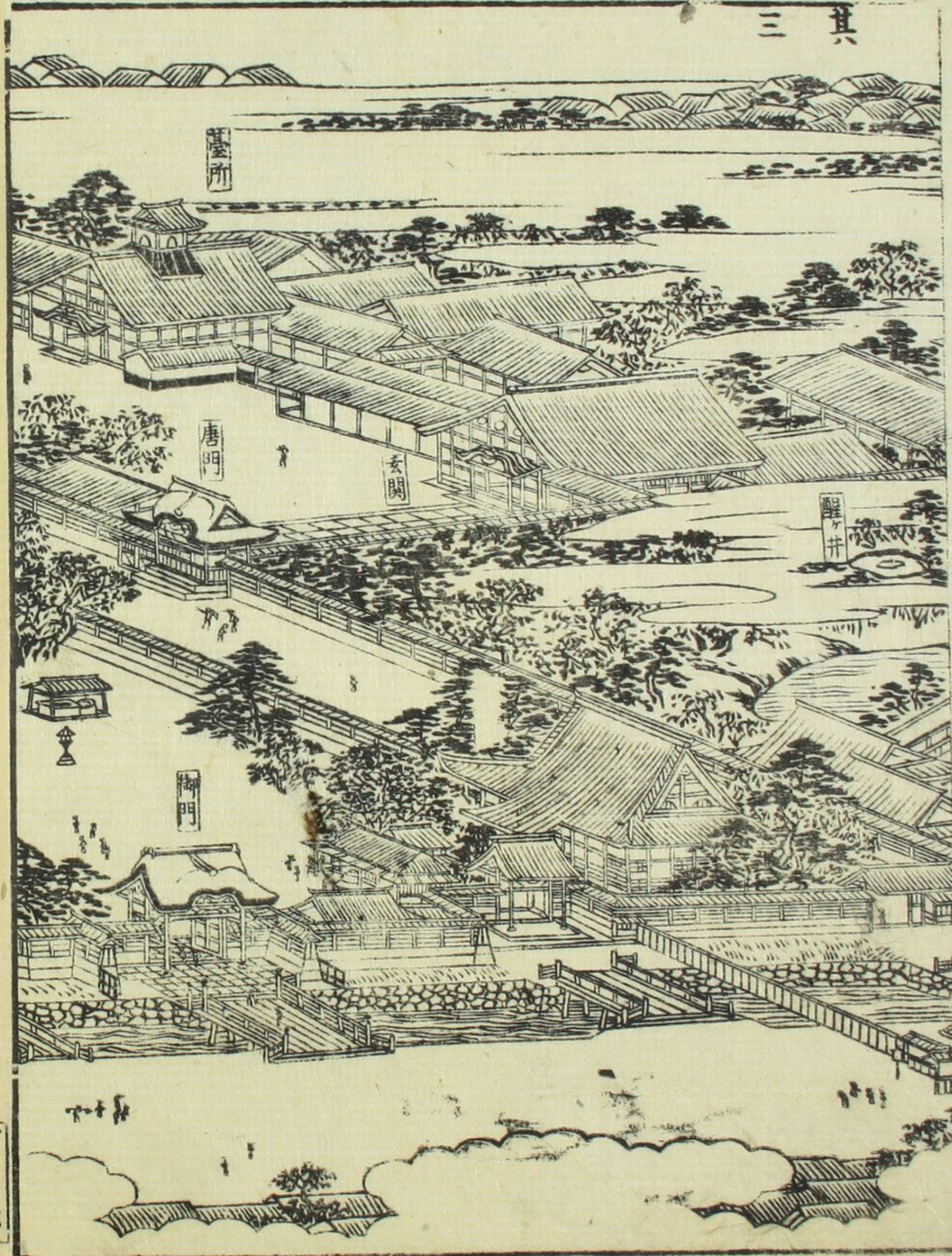
南水

寺中

興正寺の御門跡御堂



其三



二十四輩順拜圖會卷之一

興正寺御門跡

西六條あり

往昔高祖聖人御建立乃靈場也樹石山科中興大明華恩

隱大納言經豪上人又連教上人佛光寺を創別立其後當

○沖什室はる祖聖人御壽像御前○御簀聖人後鳥羽院

御直衣勅して聖人へ其外靈寶勅書等教品御傳末の書之

佛光寺御門跡

高倉あり

渋谷山華恩院と稱以真宗相承の一本山なり御極祀曰

聖人勅免御降洛の砌山城國山科郷一宇を御建立之

寺と御直身真佛上人附屬此真佛上人と云は

鸞聖人御直身乃中別博學多文まじく内外乃

諸典と暗くは聖人御相傳乃安心らきらうと御しまうと

御俗姓は拍原天皇の末系鎮守府お軍平國香の後胤下

野の國司大内家の息男なり此又真佛上人第二代の法脈

を相承し終ふと云は野州專修寺寺勢之儀を聖人より

仰聞らるるなり興正寺と源海上人附屬て國末なり

且終る源海上人曰く聖人乃直身なり此源海上人と

中以は原姓大藏冠の末裔日野家の庶流なり武州荒

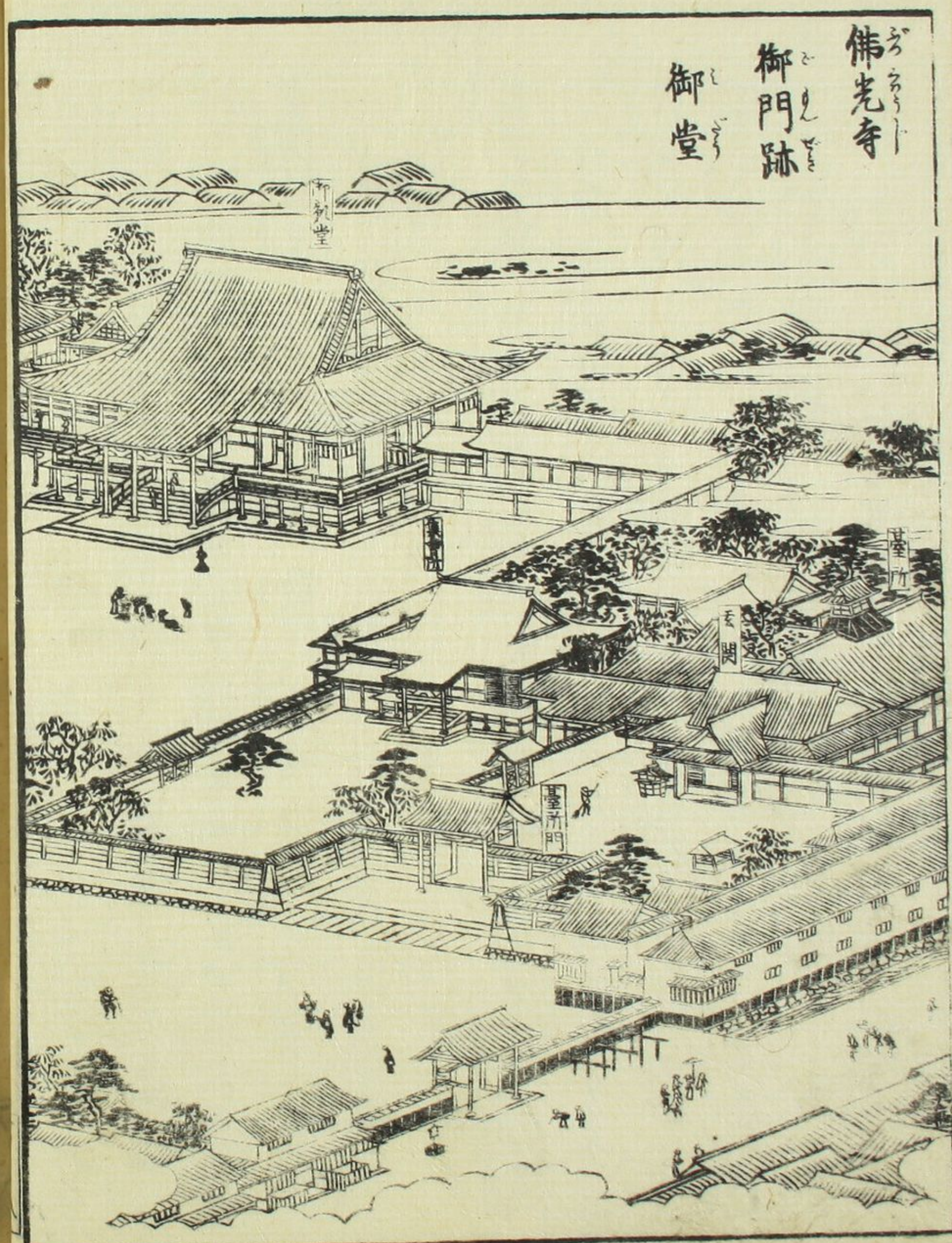
本乃任人安後駿河守隆光と云又文武又譽ある武士なり

隆光二人の男子あり兄と月壽と名はけ分を花壽と云

寵を限りらりしと有る無常のらりさま老少不定の海

婆の夢いく兄の月壽七文花壽又なり病なり

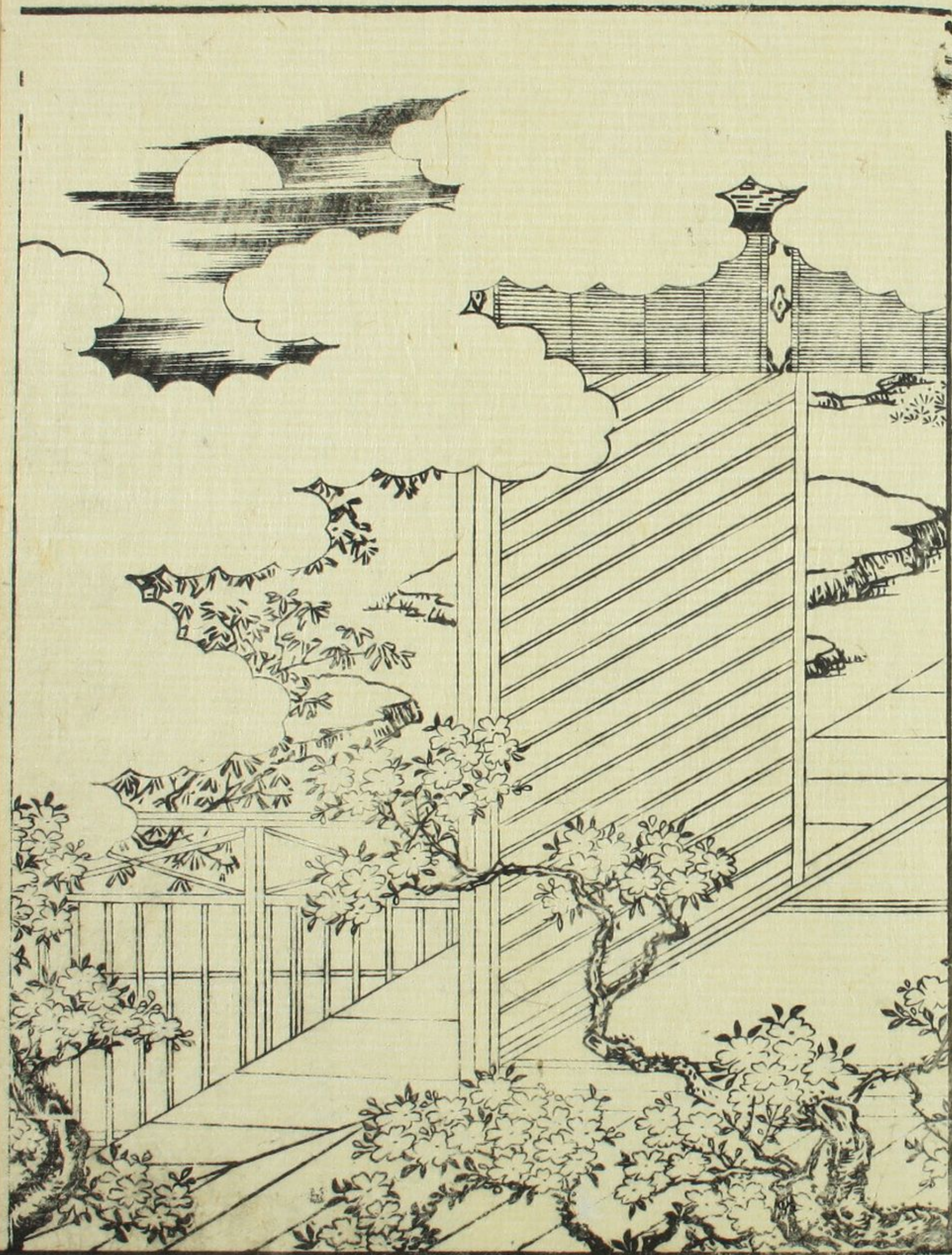
かく同日雲霧の命消らりたる隆光天呼び地は咽ひ泣く



佛光寺
御門跡
御堂

源海三尊を多く苦み死せむとまで歎き居りしが
疾の憂に端嚴正相の僧来現して告て曰く你二人の
を觀音勢至の二大士に假よ愛子とせむと無常變易
の理と云く終るこれいと人よ汝を夫婦として菩提の
入しめんがなり今幸に末代不思議の若知藏あり親
聖人と名く你彼知識と謂し如離の要路を問ふと告
終る則ち是より隆光大に歎ひ急ぎ聖人の禪室と易
なり聞法隨喜し多竟に聖人の御弟子とあり終る時
康安元年隆光三十四歳なり則ち聖人法名と源海と授け
終るしが源海上人博識高才なり智徳勝る終るなり
當山第三代の法嗣と相承し終る
源海上人の傳り三州如來寺の傳り其
外諸書に委しく載るれば其意に據
てはる其後人皇九十五代後醍醐天皇の御宇に當り當山第

七世了源上人の時當山御本を阿彌陀如來令先と故に
棟宮の内をうやまし玉神と喚し終る至上後醍醐天皇
異の思いと云し終る殿感の餘り詔と下し改り勅して佛光
寺と寺号を終る專修念佛の棟梁なりべき論旨と賜る則
此る像の聖人六角堂御系籠の時感徳し終る石の像也
尚又別々宸翰を深らと祖師聖人の御傳抄と書寫し佛
光寺へ寄附し終る祖師聖人傳來の宝物なり
○根堂本を阿彌陀如來 此る像令先と故に棟宮
を傳り終る由縁先記に 御教を 山内
傳り終る
○副法相兼乃名号 照書に曰く若し家
を傳り終る由縁先記に
○附法 終る由縁先記に
相承御製法衣 法衣上人より親傳り終る由縁先記に
風俗に法衣上人の御法衣を以て其後傳り終る由縁先記に
法衣今後御製者也多号月日御自在を以て終る



本像 法光上人用山聖人遷遷流の附而聖人... 御傳繪二卷 後醍醐天皇の御宸筆... 九字名号 後水尾院 十字名号 後深草院... 其外什宝教多異之

○寺中六院家。西の坊長性院。南の坊大善院。南の坊昌飛院。中の坊久遠院。奥の坊教恩院。新坊光園院。

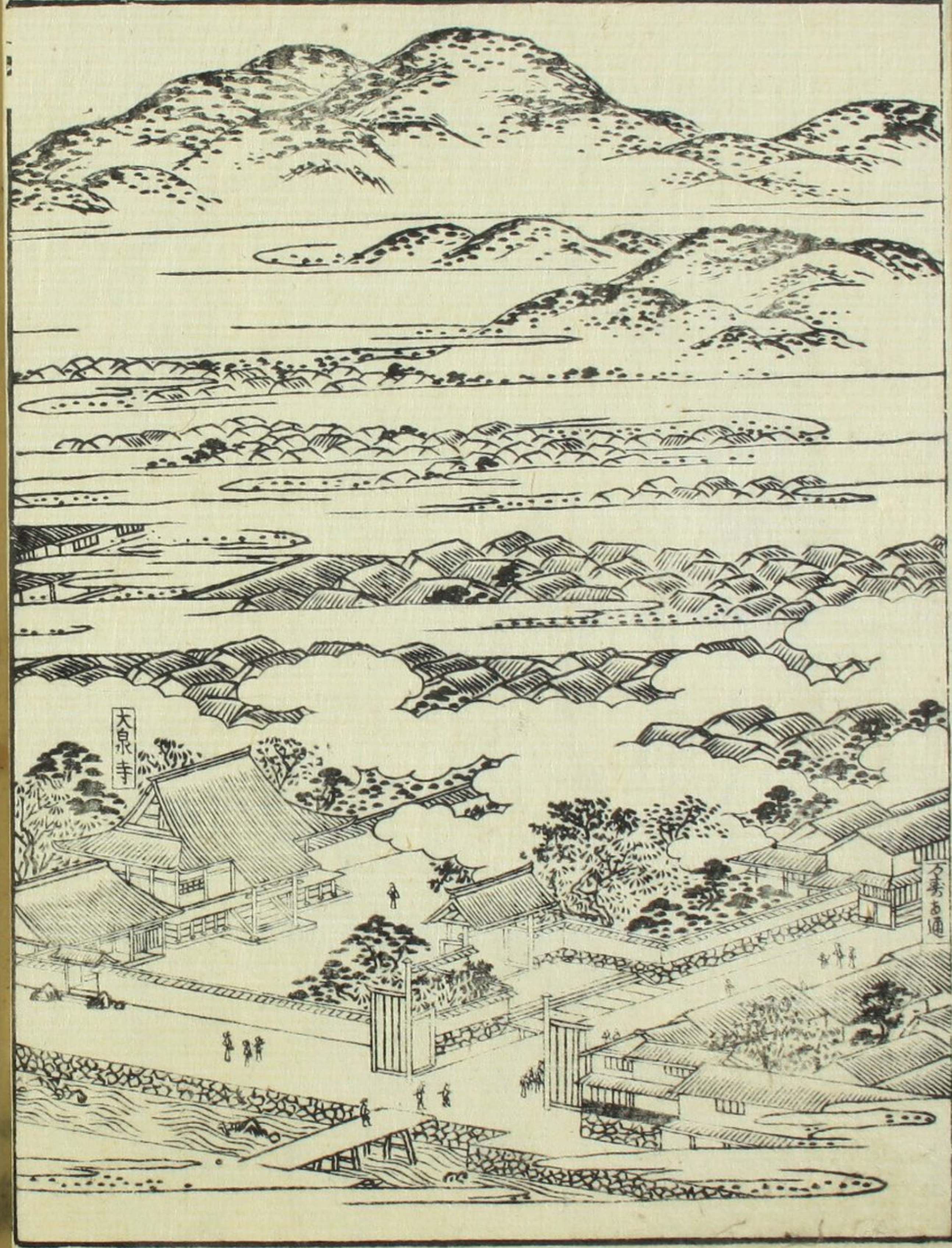
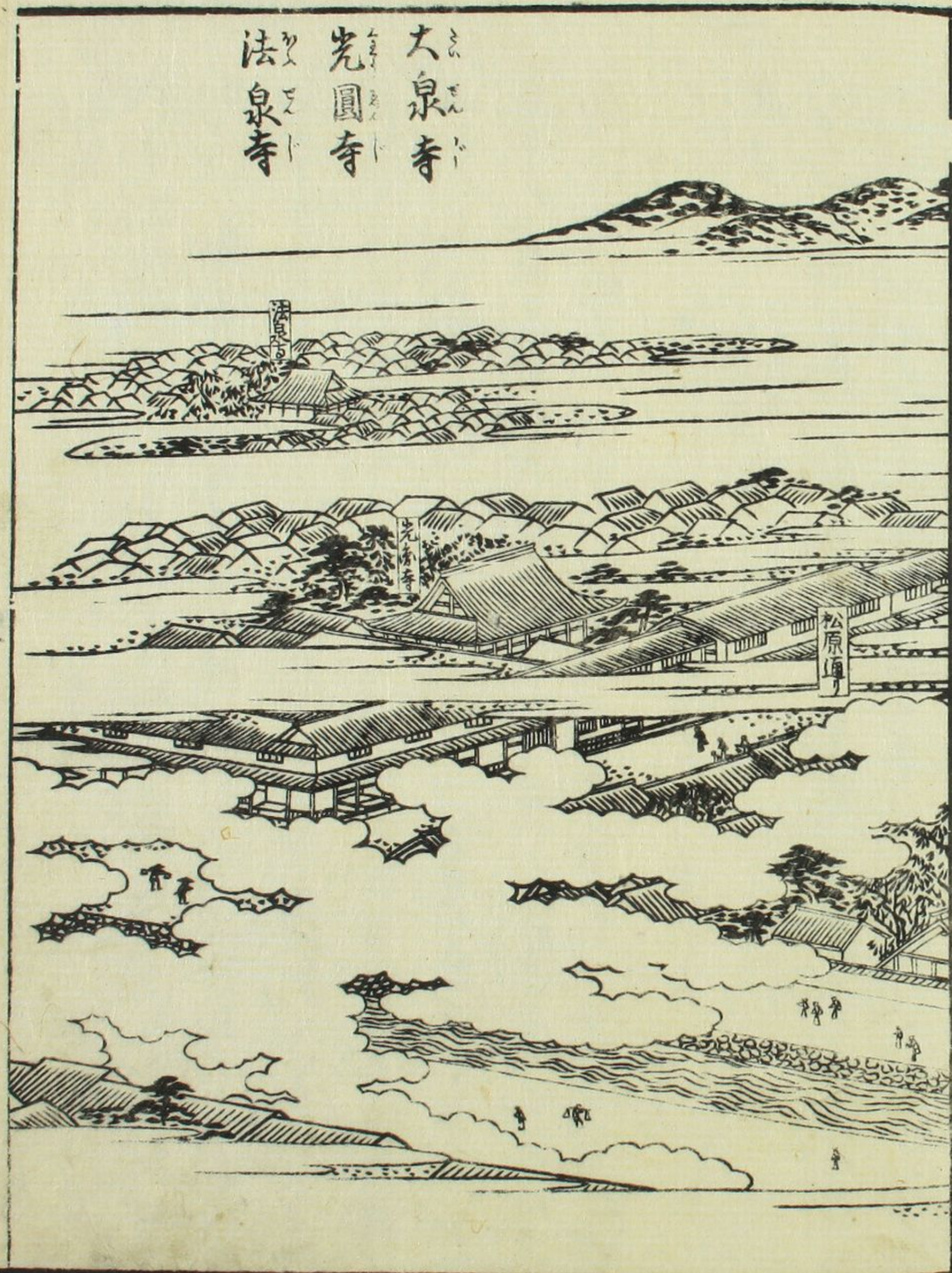
昔の坊舎に十八院あり... 法光上人の御舎見... 法光上人の御舎見... 法光上人の御舎見...

大泉寺

此寺今の浄土宗にして花降山と名づく... 法光上人の御教化と云ひ... 法光上人の御教化と云ひ...

法号一 院居一 修入御別殿の舊跡あり... 月輪殿下の養老として此御殿に入せ... 佛と勅給はしく... 此所とも月見所と号ると云ふ... 玉月君のいりれり...

大泉寺
光圓寺
法泉寺



光圓寺

東流

松原通西洞院

此寺花園光園寺と号しまじく九條園白殿下の御別荘に
建仁の頂鸞聖人此殿に御移住はしく又御年六十餘歳
関東より御降洛ののち居住し移りて西洞院花園御坊
と稱せし其舊地を多々明方より御傳繪抄下の巻并又修
云五條西洞院より是一つの勝地なりとてあがく居を志
め移入とあきば則以て澄ととて今乃松原通と云ふつ
一の五條通之常陸國平右即然也一系清の侍奉の中
を尋ねりたる御坊も此光園寺の地なりと云き也

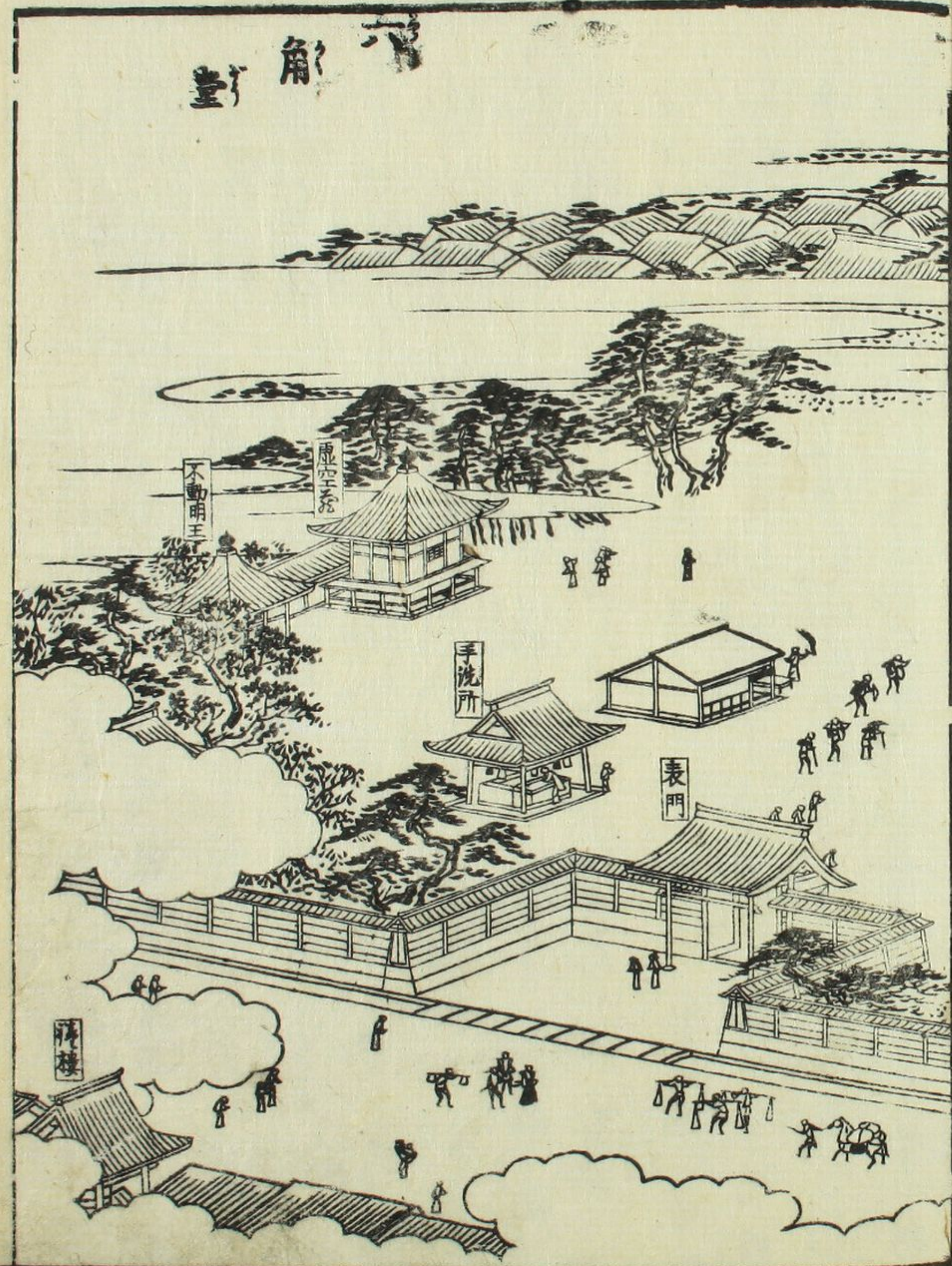
六角堂

頂法寺

聖徳太子御建立の靈場所奉尊敎世大慈の御正侍の
聖徳皇七生御身を放ら給ひて心身の御安んじ御

つらつら世にわきまらるるに今安んじ思ひ抑親鸞聖人の
靈場(百日の参籠)つらつら世にわきまらるるに今安んじ思ひ抑親鸞聖人の
唯是一朝一夕の所なりといはしまさば必は聖人の大慈
御身を余り五濁の九慮をく安樂の導き給ひんがため
御身を若くし給ふ今其流と汲の門系に身より油を
後で眼より血液と流し其恩徳を頼り其教を信
んじまじのかり聖人始り比叡の山上まはしくて難妙聖
道の御修妙又身心を若くし御まじらるるが哀愍大慈の御
心くみまはらるるて嗚呼此難妙や此苦妙や我が小まじら
安き小路なるみいふいりや末代の九変此難妙と勉
み堪んや願くも濁世の衆生をく是妙の大道に安ん
若界と海原せしめは我身れたる毒中よ若と受る

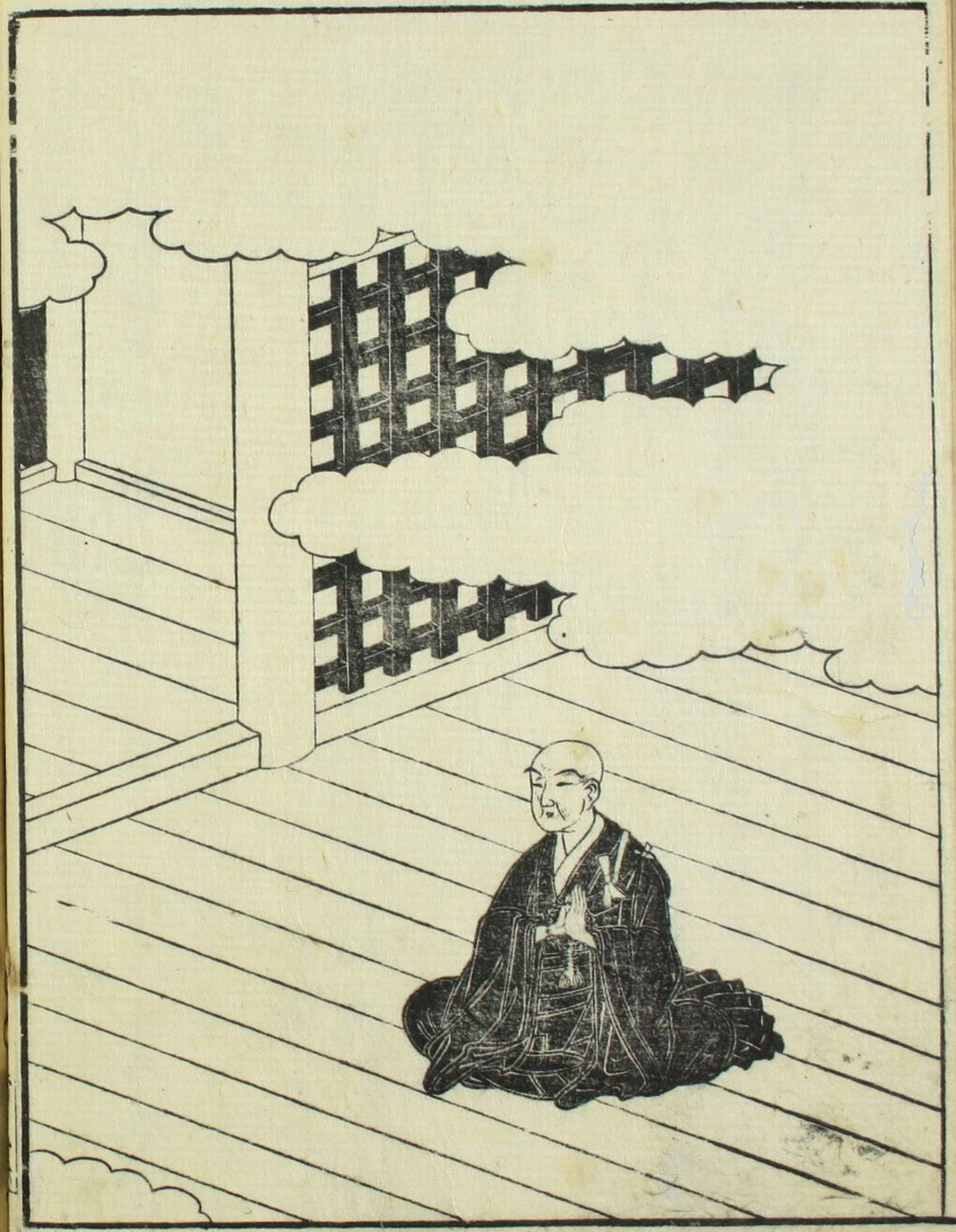
寺角



とも又又厭ふけりしも乃をと既又根本中堂へ歩くと
遂に薬師如来又祈誓し終る可教百日又及びせらる
しうを止して薬師如来の靈力を蒙り此六角精舎へ百
日糸籠と成し有縁の祈法と成し終りしう祈祈願
あつせられし名はし押入比叡乃高根より夜毎又通せ
終る 叡山大乘院より六角堂
まで約三里十八丁 実々けりし雲母坂昼ぶ小足の上
難くて通ひし山まも登るも若く下るも悩む終る磯
たる山坂を風雨をいとり夜昼夜と撰り成り跪きあふ
終るしうを運ぶ終る加々加茂川の流る流る
てる石渡り時としていづれも満ちたがうれとも厭はせ
終りて終るなり消通ひ参りて終るが建仁元年乃春
聖人二十九歳にして救世菩薩の告命又依て若水乃禪

坊より法持上人と値遇して易經の大道を説き論
証せり本願と弘め凡そ女人を引奪し終るこそむがう
其後かゝりて救世菩薩聖人の告命し終るの母はしけ
て建仁三年癸亥に月八日乃夜寅時菩薩顔容端嚴の
の聖僧の貌を不現して白袍の袈裟と着し廣大の白
蓮華又瑞座して若信又告て曰く
行者宿報設女犯 我成玉女身被犯
一生之間能住庵 終終引奪生極樂
是のこれ我誓願なりと告終る 此の誓願は
此の誓願は此の誓願は此の誓願は
此の誓願は此の誓願は此の誓願は此の誓願は
又善信しし以所名の此時觀世音菩薩の妙い終る所名

坊又あり法苑上人の値遇して易妙の大道を説き餘流
 如世の本願を弘め凡夫女人を引導して流ふこそありけり
 其後かこ寐て救世菩薩聖人の告命し終つるの母はしけ
 り建仁三年癸亥日月五日乃疾富の附菩薩顔容端嚴の
 の聖僧の貌を承現して白袍の袈裟衣を着し髪丈の白
 蓮華又増養して若信よ告て曰く
 行者宿報設女犯 我成玉女身波犯
 一生之間能莊嚴 條終引奪生極樂
 是のこれ我折言願ありと告多ふ
此の文委しく御傳抄あり又漸
 記流又明かり 宿又抄いり 寶聖人在家至智の凡夫又障垢
 穢乃女人を引奪あぶき一糸を聞んとは會得し終いぬ
 又若信と申し市名は此時觀世音菩薩の心は終り市名



なりとくやあくるに親世者菩薩玉女の身と現し聖人
乃妻室とあり終ひく凡妻女人と導き扱んと誓願あり
せ終る不可思議の方便なり則若命と玉女身と宣ふと
正しく月輪禪定の姫宮玉日乃若くを扱しとる鎮西
流津去三國佛祖傳。當流冥福及古之裏。因縁秘傳
抄其外自他の記福と考る又鸞聖人救世菩薩の誓願
みよんく在家往生の智識とあり終る事定是又あらく
しく説とるるのみ何に定又觀自在菩薩隨類應日乃
利益扱はしきして関白殿下の電女若く生く鸞聖人たま
妻の顔を治し凡妻往生の大道と教化はし終る去後凡
鸞聖人いま法苑上人の舎下と扱はしるおろ月輪
禪定若水の禪坊とあり終ひ法苑上人へ申したまはく

大師上人の淨教化と順ひ弥陀の本願と信し念佛とま
は在家出家の撰とるく教去往生の了解我若く扱ひて終の
疑ひもさふらつに名去大師上人のよく持戒精進の出家こそ
念佛して往生も志終りん女戒在家の衆の念佛とくつ定
付せの不定なりんつと何やぶと疑ひ中人き門衆もまうるべき
希くい淨弟子の中とて末代在家往生の若知識とあり
終る今浄僧一人我も場里いし我娘玉日と配偶して
末代の在家凡俗と往生させういせと余若くも申し
終ひつる大師法苑上人たまに終ひ禪定殿下の信と
と定は我日頃の念願と叶つり妻細きうらまはし若信淨
坊今禪定の仰とあさういしく彼亦に集り終ると信し
其の耐聖人唯浄派のみとせ終ひつるが良みて申し終り

抑も九女はして慈鎮の尚の門系とありしよりこそ極
至家の交を放ち専ら佛道と好せんとするなり外なり
今又大師の禪坊と末門とを只一篇の念佛して弥陀
の津去と教へのをかりんぞ殿下此御石に入て此身と後
又仰てんやいふ事は教百人の御弟子の中にて若信獨
携へ出されし御仰と受け終りるなりや偏も此の免した
まはししと異くとや引りて終ひ墨澤の御神と後らせ
終ひされが大師聖人又宣ふ申うの若信御坊乃仰ことり
よ空へいへまうが今御坊我念佛門に入終るも私の志興よ
ありは六角堂赦世菩薩の御引奉也既又彼親世若善
護の御物諾のありしを肉心よ包て他人よ語じと深
く強し終へども源空の其のりともと暗よよく知り終りたり

赦世菩薩の告命かうに遠へさせ終るなりはと彼こ
よし以菩薩乃承し終ひるに白の御文を白地と唱へ
終る親鸞聖人歎息して宣り今何とや包とさうらふ
き其告命承りなる小お遠これに承いませ心と秘し
て曾て他人よ語じ終る大師上人暗よ是と去らしめ
いふ人のんぞ仰と背きいふた人予又歎の毒中よ
く無量の業よ若むとも至家不智の男女と赦つんお
る御もいへ心さうらひにさうに殿下の命よませ師の
仰よ終ひるなりとて直に園白殿下の御殿に入終ひ
玉日の姫君同居して夫妻の汝と承し末代在家修行なり
若智識はあはれ終ひる
●親鸞聖人此親善の告命御心と秘して他人よ語り終ひ



ざうふ法然上人獨僧みこしを初り終るる何ぞ凡意の
 斗知る不るらんや法然上人を心奉養至善講の化現
 親鸞聖人の明らふふ弥陀佛の愛法玉日眼否別親善
 薩埵の應化るれば三尊一樹又出現して平等利益の化
 と成し終るる實は隨教應問の大悲悲喜の派又咽んでる
 いなるんきよのりるをや尚ふ此事實我宗門獨の石流
 又源氏他家の記福にもしきうかみ是と終る不謂前よ云
 鎮西流の記福に角堂の記其外自化の諸傳よ分明也
 極此にるの流按も洛陽寺町日本屋山寺よ傳來凡
 法泉寺 末流 掛馬場通押小路
下ル虎石西にあり
 當寺の祖師聖人御入寂の右流之付右聖人の御令身忍
 有僧都の御里坊より昔に善法院と稱せし聖人院よ

小法統上人獨備みこれを知り終るる何と九歳の
斗知る不らんや法統上人も正教勢至菩薩の心現
親鸞聖人の明らう小弥陀佛の愛祐玉日曜若別親者
薩埵の應化なり三つ一時に出現して平生の相益の化
とよし終る実と隨教應日の大悲悲喜の涙を咽んでる
いなるべきものなるを々尚又此奉實我宗門獨の石流
み流は他家の記福にもつきかみ是と終る不謂る云
鎮西流の記福六角堂の記其外自他の諸修も不明也
叔此に白の流授る洛陽寺町日本屋山寺と傳来り
法泉寺 末流 柳馬場通押小流
下ル虎石所にす
當寺の祖師聖人亦入寂の右流に付古聖人の亦令身
有僧都の亦里坊より昔の若法院と稱せしが聖人流

小隆園東の化益過る六十歳の以花洛と降り終り五條
西洞院花園の亦坊又と濃谷の亦寺園崎の亦坊扱不
又後任し終り又亦老卒の後此亦坊にも入せ押し
蓋地力信心乃正因專念稱名の正業と教化して化と十
方より瓜し蓋と末代み終り終り終る既又化縁の勤つ
きさせ終り以弘長二年中冬下旬第八日午時満九
十歳あり念佛の亦夢終る淨土と降らせ終るの
亦旧跡也寺内より古井ありこれ聖人朝夕をせ終り
料と漏れ出る淨水ありしと濃み化益を蒙る乃軍
末代流と汲むの門系悲源扱地して尊重と人
し乃なる此所を虎石所と号る小謂あり聖人を
世の昔虎石と号る名不と産の藥山と居る朝夕是

元政法師
虎石を
見取



を覺し給ふ事生るものと覺し給ふがごとし給るは聖人
 既み河入滅はしく多時此石のまじりて汗と流し
 生るがまじりて夢を覺し給ふ河門系乃僧達是を
 びき奇異のまじりては此の流情乃本石まじりて聖人
 入寂乃河別とて悲しむんとて涙をまじりて給ふかく
 て年久しく此寺は傳ふ事せしむる同委若く其の石なる
 と聞石流く無事ありてこれをして伏見の城より引いて
 愛し給ふ後年伏見乃城河を拂ひり砌諸人皆是と
 知り給ひて其の流情のまじりては此の流情のまじりて
 寺とて日蓮宗の僧霜月二十八日此傍を通りけ給ふ
 麓の中み此石を迷ひ給ふは僧不思議の事なり
 思ひ及散流は知く名石なる事知り我寺は持障り遣し

て弄ひしものとせり然る小此僧或夜の夢にけ石親鸞聖人
の河寺へ来りて其中と言ふと見ると大き小勢と我寺の
庭にけしと直に東に願寺へ執せらるる今東大谷
の河廟の内は納め置給ふ石乞ことと實に石の氷情の
世のありと人々聖人於哀の内心に感して悲喜の夢を
發し是又不思議の事なりといひべきもの也け謂はるる
て虎石阿と号るといふ此寺往古に魏たる靈場ありけ
ととも中右兵乱の災ありて廢退して小坊と名せり

○桂河坊 洛西桂の里寺内村と云七条通
此所坊と往古に親寺第三代覺如上人建立し終る靈場あり
寺号久遠寺と号く依て里の名も久遠寺村といふと云西
本親寺の河別院ありて覺如上人の河墓所あり

月輪寺

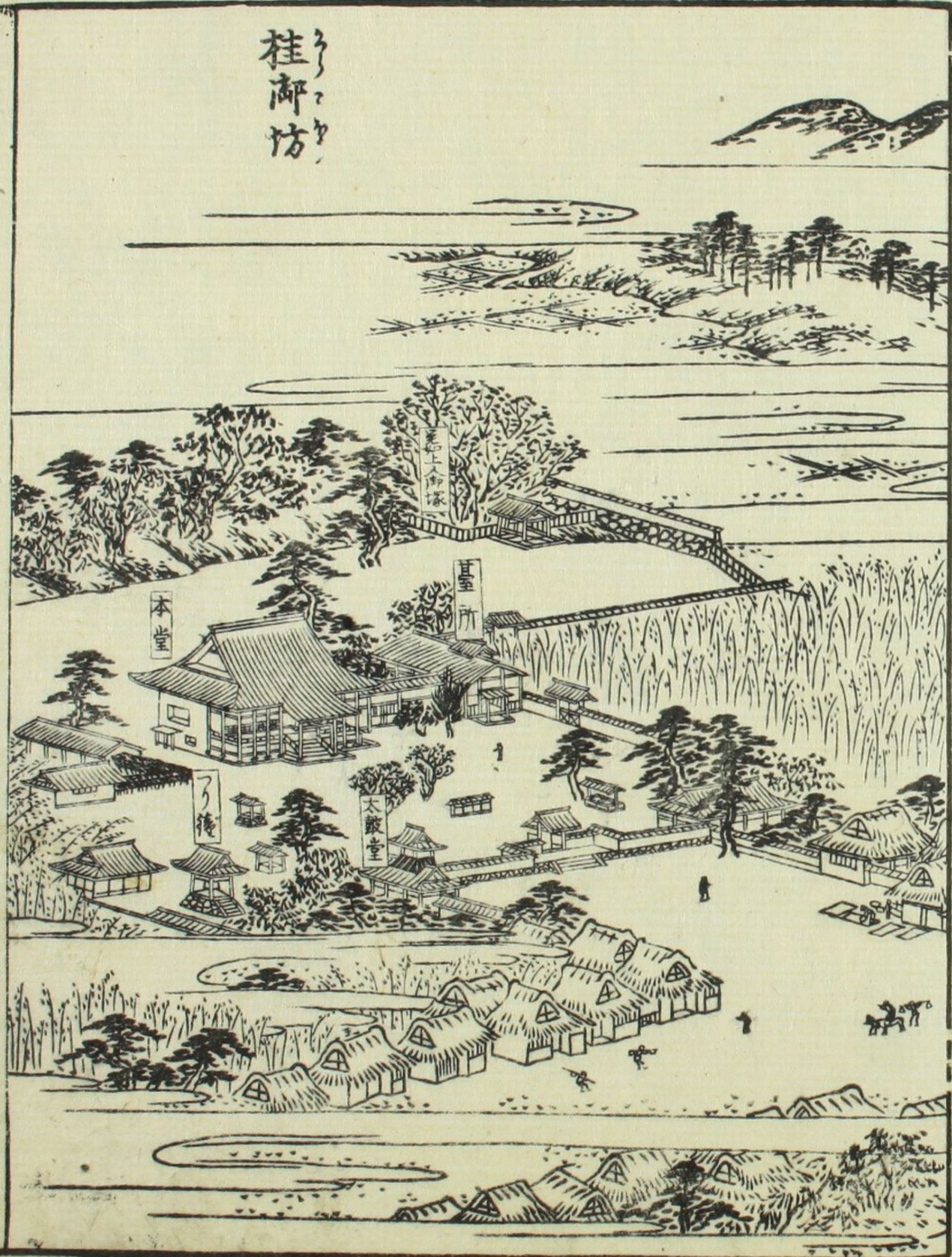
龍谷山の上のあり

此寺は往古空也上人の閑き終る古院あり実には山を
上人屋を放し里遠く雜談の夢ときり寂靜にして教を
を拂ひ閑然として佛道と嘗て思ふと終るよき乃地を去り
よりてかくかくも九條園白兼真云此院に入て入道し道
世の河身とあり閑居し終るありと云又大師法苑上人
とけ院にまきと靜に念佛し終る親鸞聖人より度く来入
ありて殿下と云又稱名念佛の正業と修し終るしと云
そけお大師第三師の親像母のく河自修ありて此院に
安置せり又禪定自植終る時雨の標と云石樹今
も存在に尚け山中岩間より出現したる丸鏡あり月輪寺
と号るなり此謂へといひ終るなり

西大谷

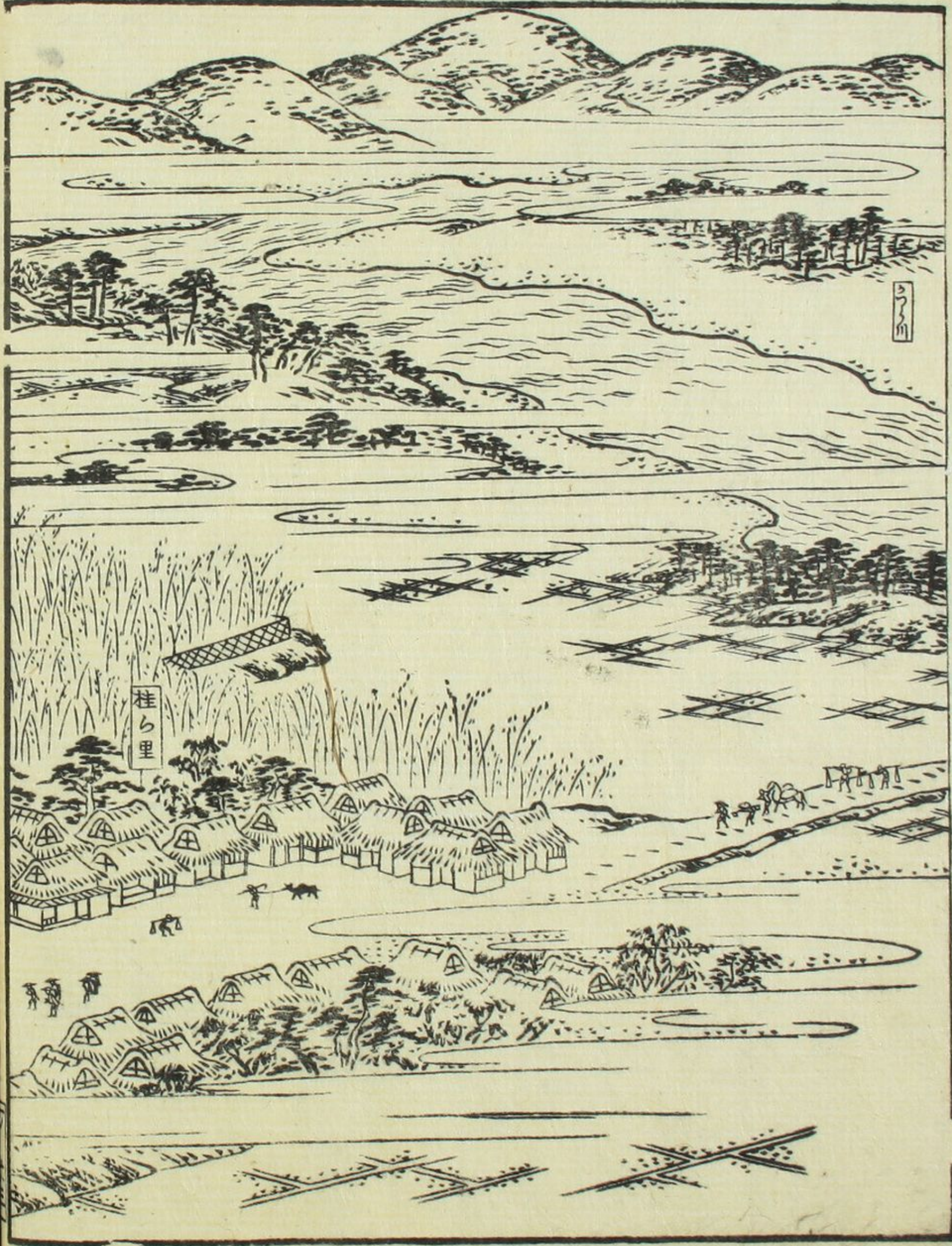
龍谷山と稱れ

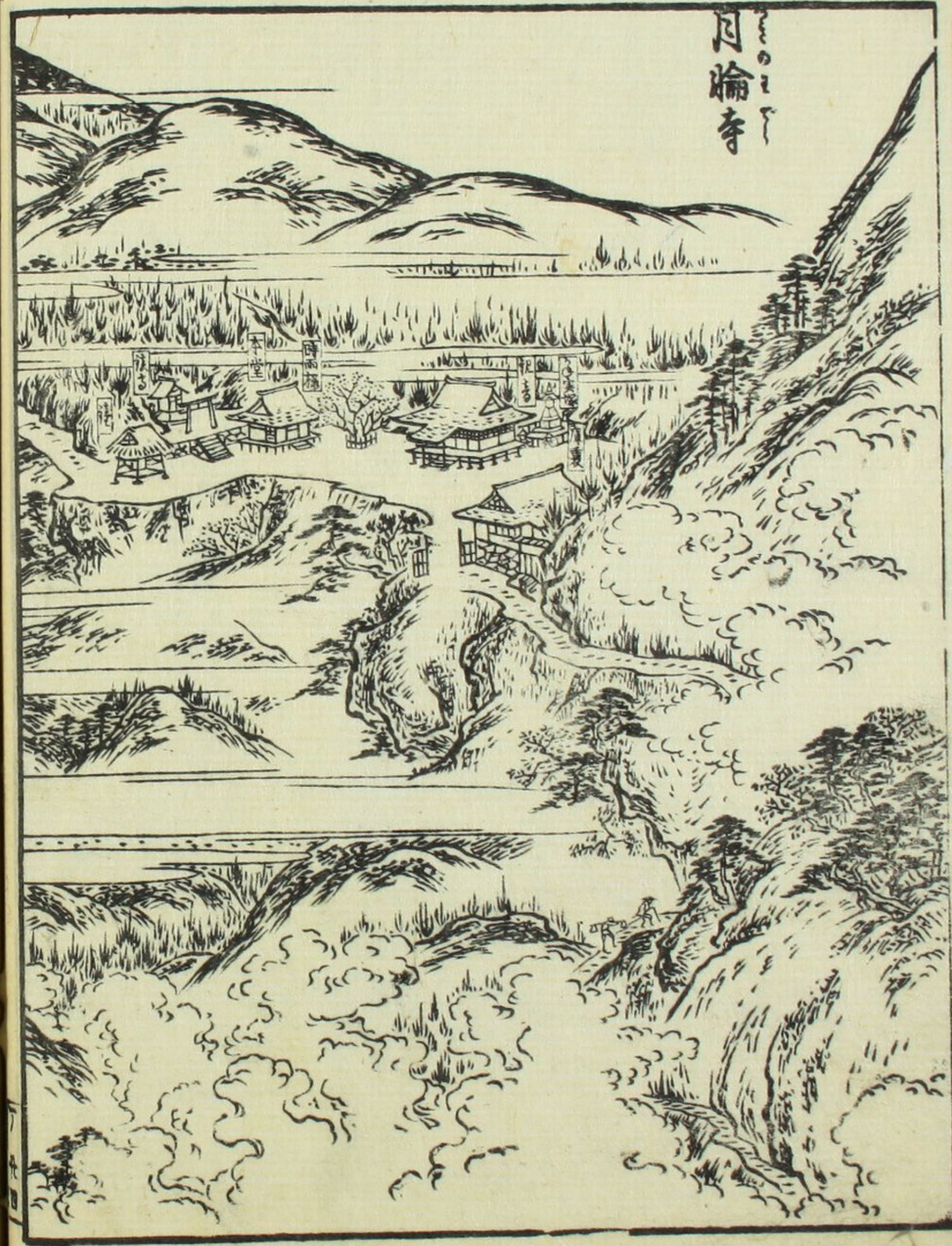
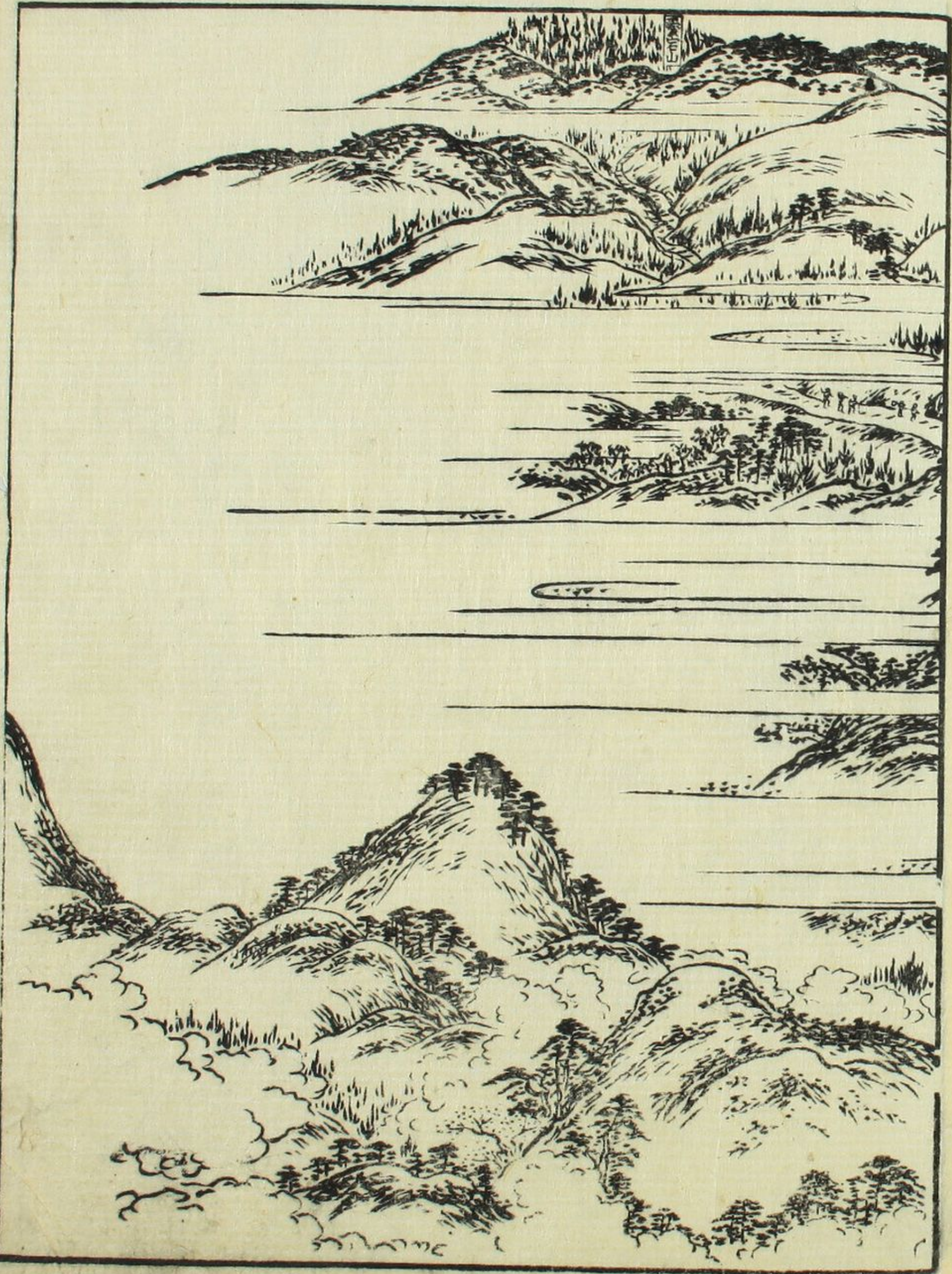
桂
湖
坊

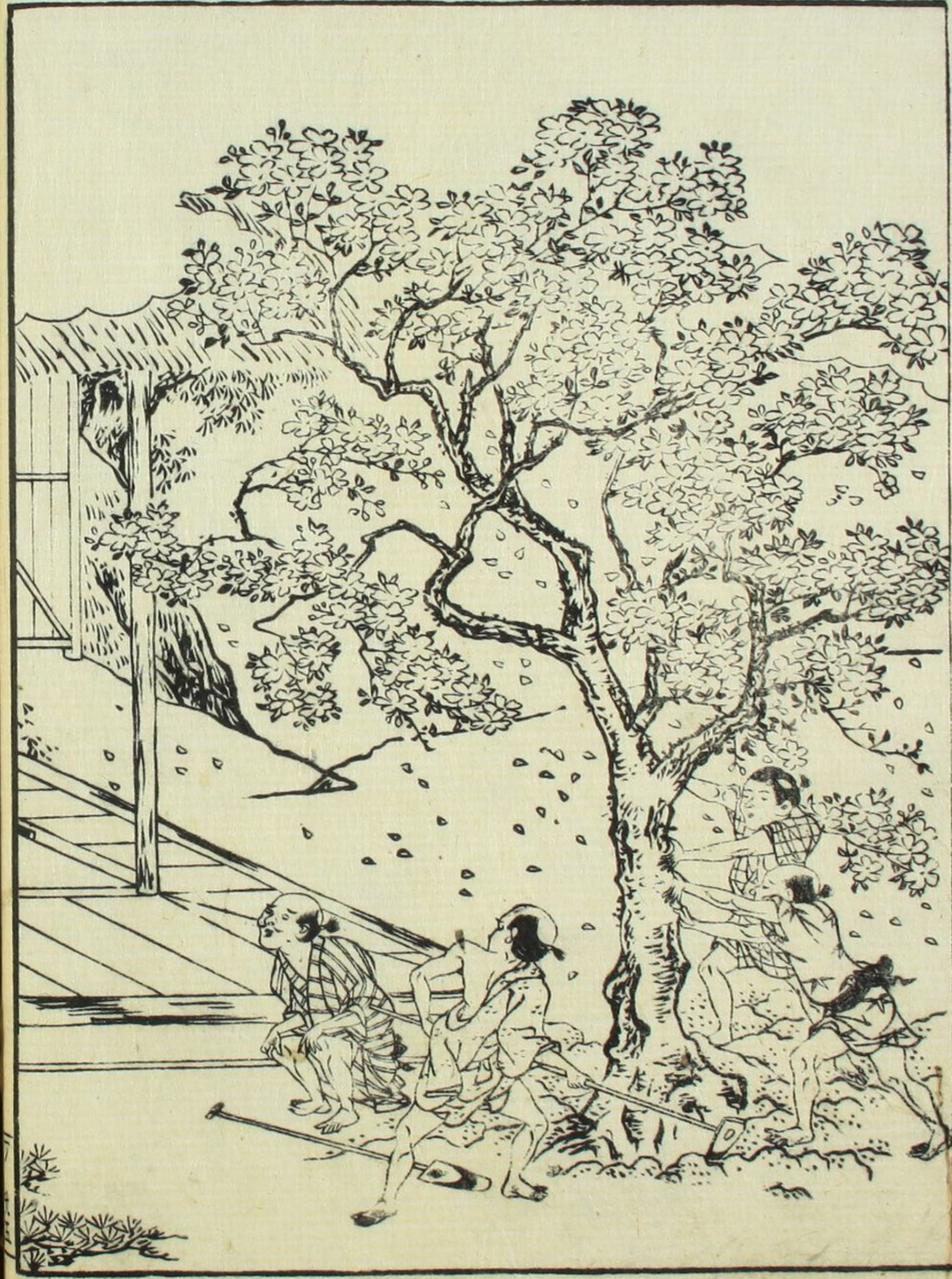
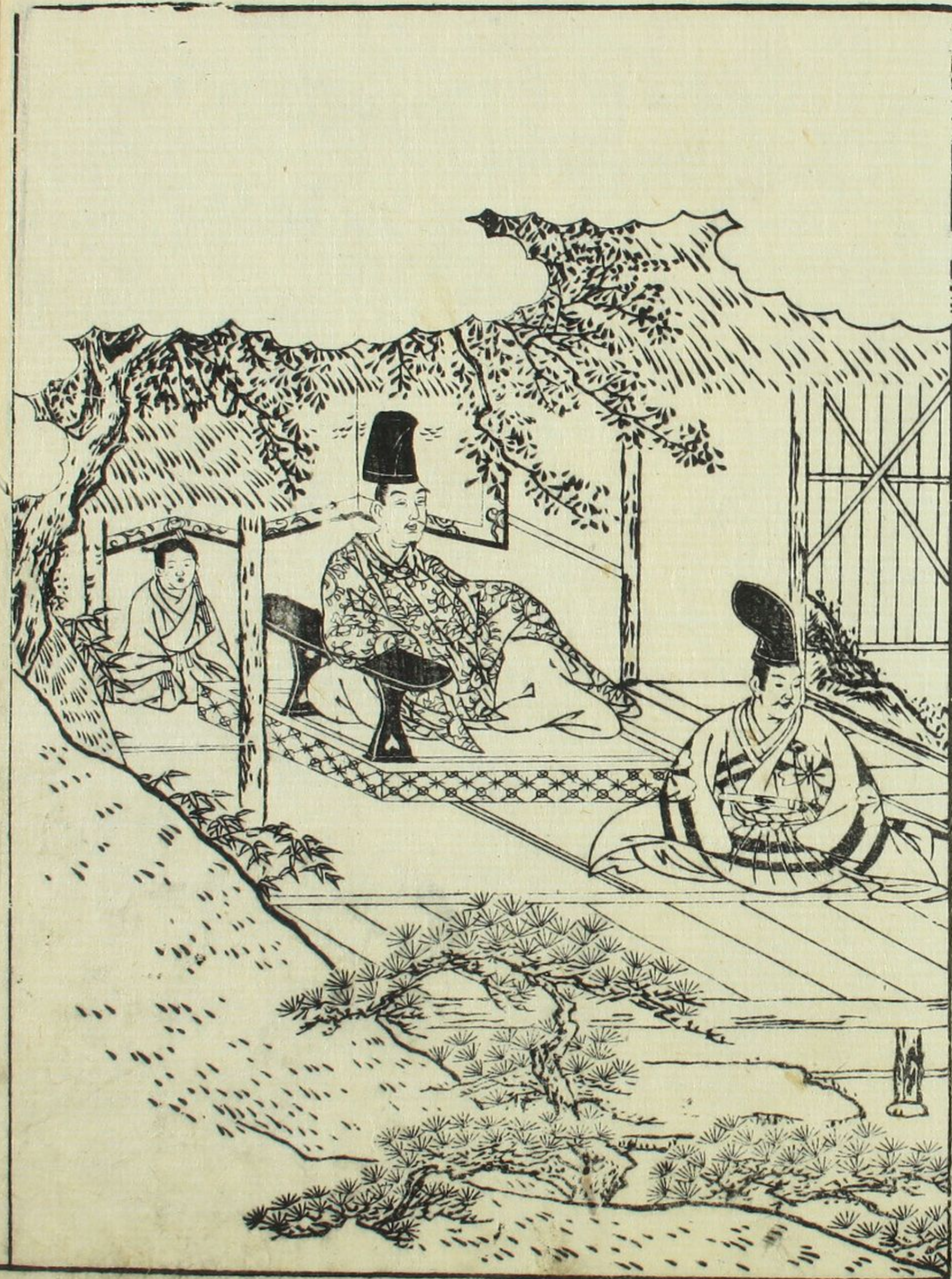


三ノ川

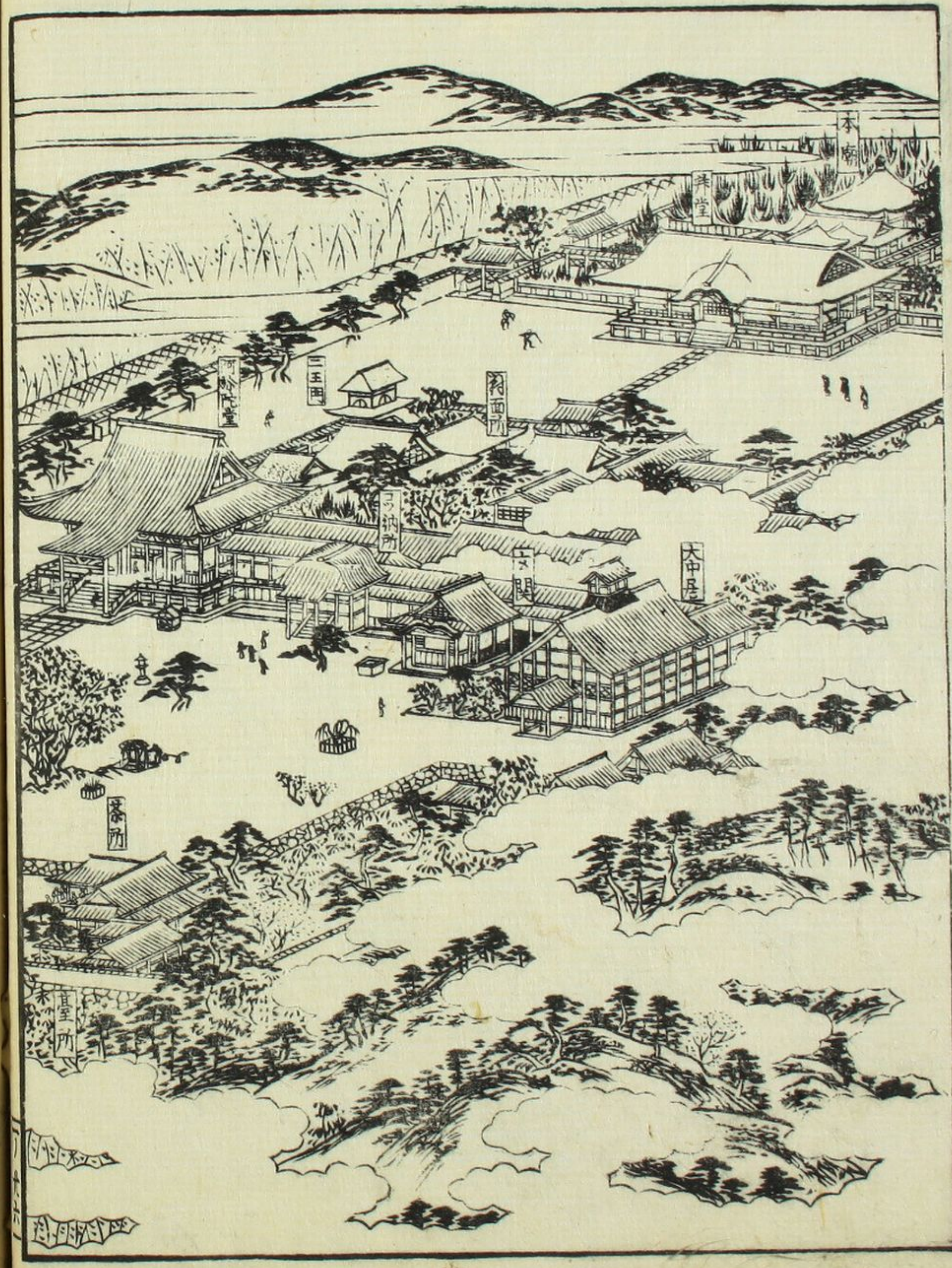
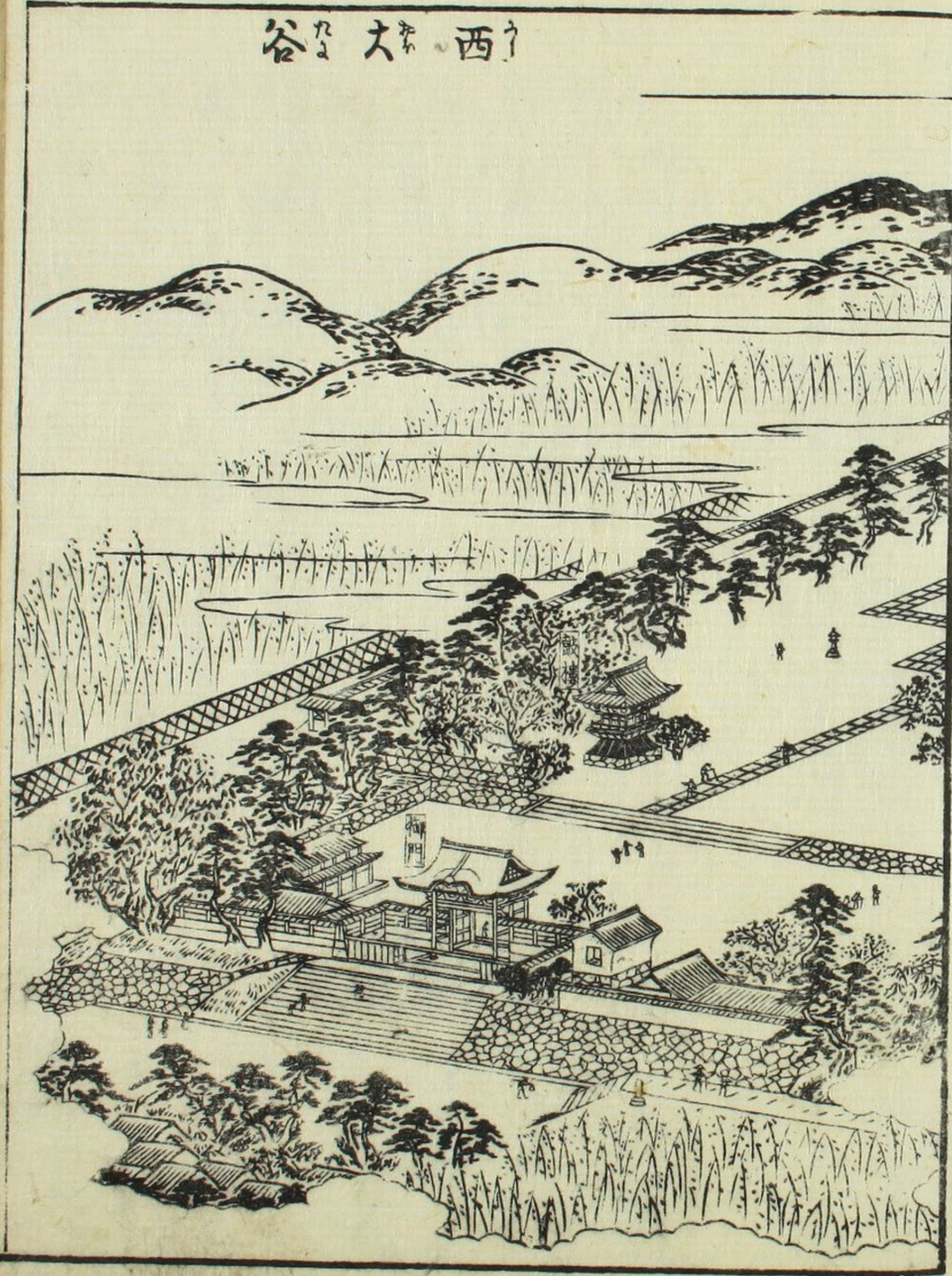
桂
の
里







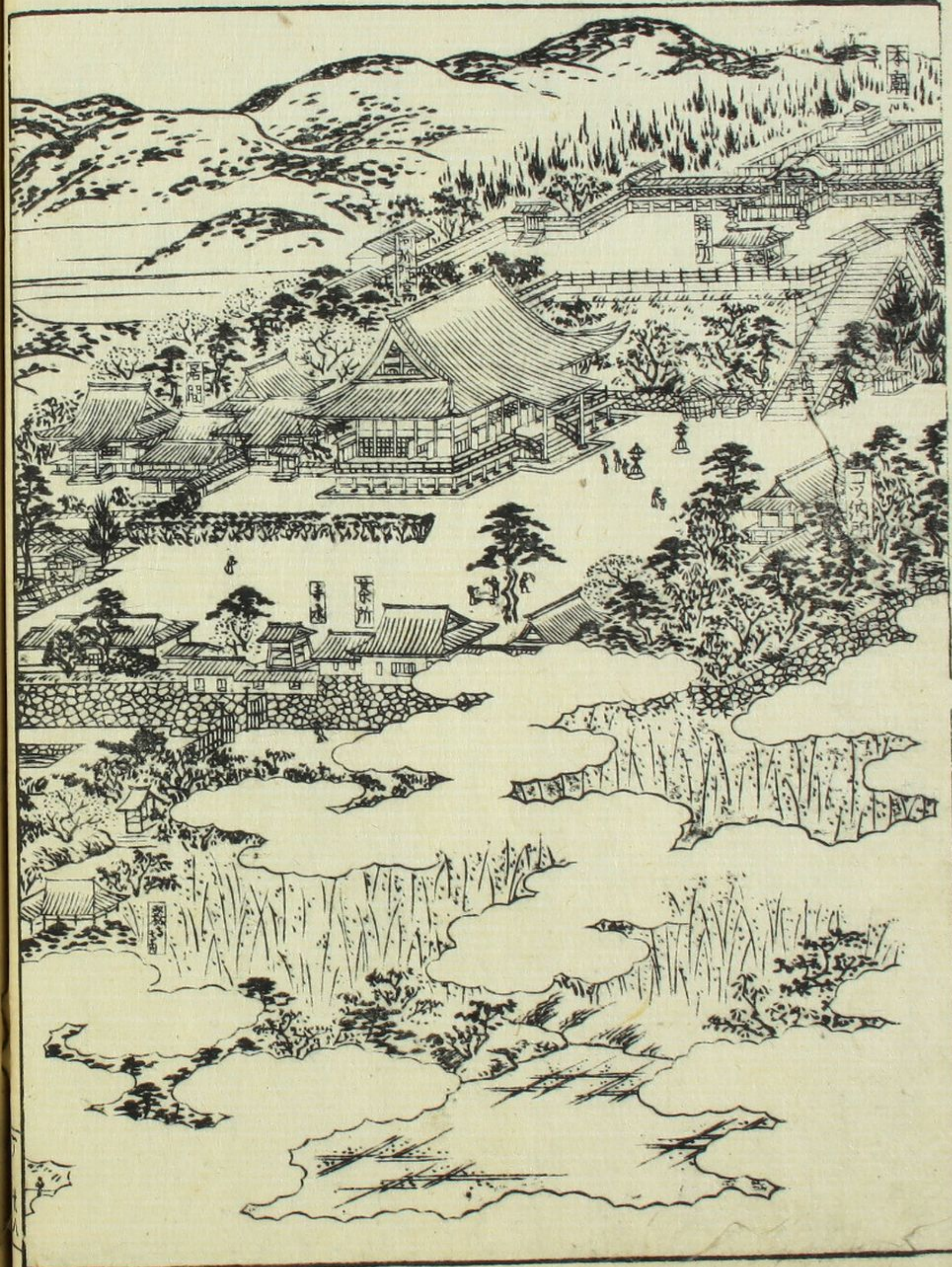
西ノ大谷



宗祖親鸞聖人の御本廟なり弘長二年壬戌霜月二十
八日柳馬場押小路法泉寺の旧地若法院より移して聖人
津去又遷葬すはしは月廿九日洛陽東山西の蘇島造り
南の傍延仁寺より御本廟を蘇島に奉るまより第三日又
蘇島より御本廟を蘇島に奉るまより御息男印信僧都并御
智坊専海坊等御送骨を拾ひはき十二月六日多郡建
乃山の傍大谷小納り有りて石碑と造立し移し其後九年九
月二十又日印信僧都二丈五尺十三重の廟塔と建らし
ころや印信僧都の御送骨を蘇島に奉るまより聖人滅後十一年とて文永
九年壬申の年大谷御廟より猶西の方若水乃山の傍より
新地と開き彼遠岸と極後一町に佛圖と建て御像と安置
し移し此年の乙未川より移くも人王八十九代龜山帝より

本願寺と勅号ありて代々御祈願所なるべきの倫方を賜り
則帝御宸翰の勅額を掲げ移し叔岡山聖人より第二代の
御住職より御靈孫如信上人へ附屬し乃山血脈相承し移し乃
か如信上人因東御化養よりまはつた聖人乃御息女覺信
禪尼此御本廟と看たり移し覺信尼公乃御息覺惠上人
唯若上人の御兄弟御苗守職として御堂の南小坊舎とま
居住して守護し乃世より是と南殿小殿とありてお侍
て覺如上人弟三代の住職をおし移し而してより後御代々
御相續し乃世より梵宮也覺如上人の覺惠上人の御息男
乃其の乞う所聖人の血脈なりまより以来御代々血脈相
承して一宗を勢より移し乃其の湯世の今より及ぶも人其真宗
乃法に未代は嫡より西より移り東より承はし乃其の御

新大谷



大谷根本乃地多祖聖人の御墓所也山の中櫃ニ石碑と拜
以古樹山腰ニ連川ニ在世の姓古氏觀ニ青苔岩壁ニ茂て
歷代の春秋を惟寂靜ニ尊廟感ニ堪難クして自落
世ニ心則聖人御立世の御時御羅蒙らるる世終る虎石を此
石室ニ納め終る不方りとして大谷本願寺勅許御相承の妻
申る系に記とが如し

東大谷

大谷根本乃地多祖聖人の御墓所也山の中櫃ニ石碑と拜
以古樹山腰ニ連川ニ在世の姓古氏觀ニ青苔岩壁ニ茂て
歷代の春秋を惟寂靜ニ尊廟感ニ堪難クして自落
世ニ心則聖人御立世の御時御羅蒙らるる世終る虎石を此
石室ニ納め終る不方りとして大谷本願寺勅許御相承の妻
申る系に記とが如し

吉水御舊跡

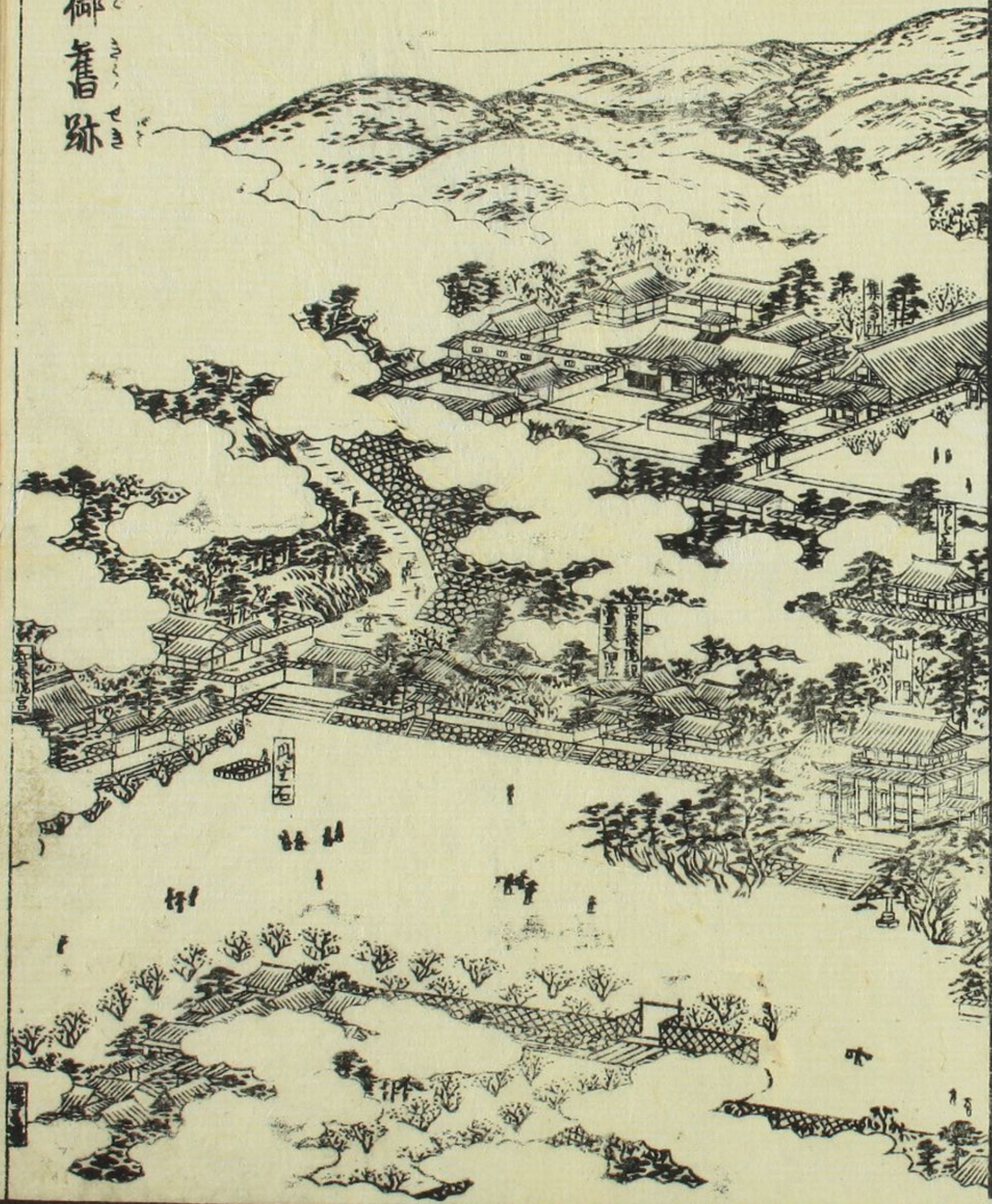
法然上人吉水の御坊より今の智恩院の本堂としりや
吉水と云る名あり丸山安養寺の中櫃勢至寺の下に湧出
る是と云り去より此傍と吉水と名つけたるよし

修ふ又智恩院山門の下南の方ニ吉水といふ名水の井あり
て今其井かづらを跡せりともつり何れ法然上人吉水の
の禪坊よりいつた造りたり今必安之鸞聖人安養の御墓所
御傳抄ニ東山西乃林恭吉ありの心乃造り又送骨と振渡
て佛圖を建敷像を安んじ記し終る所今智恩院乃寺中
臺所門の外氏生石の上乃方崇泰院の敷地ニ其田地也
と云り又永九年より遠の奉と歴て蓮如聖人の御代より出
川ニ御教化の心は抑じまはを嫉む族あり此大谷と取却
せり依て其後け地の去砂三丈四方と振えり當時大谷の地
後ニ廟堂と建御送骨を納め終る今の西大谷是之也
此大谷の地は鸞聖人難好の心所出る津土真門に入たり
不此吉水の御坊より於信不退の御座と云り

智恩院

吉水

御舊跡



丸山安養寺
吉水



安心の正を弘し及び信心一異の釋論を演て化力の甚矣
とあきつめ真影と書寫し「選擇と見字」を法脈と相兼し
終ふ大所の門徒三百八十余人の中にて鸞聖人独一家の正
脈と傳へ日くみ此禪坊み来門く本願の密を造りお
はしませし事なり何とくけ造りこそ河世の徳を慕く
まのいおつる境地なり

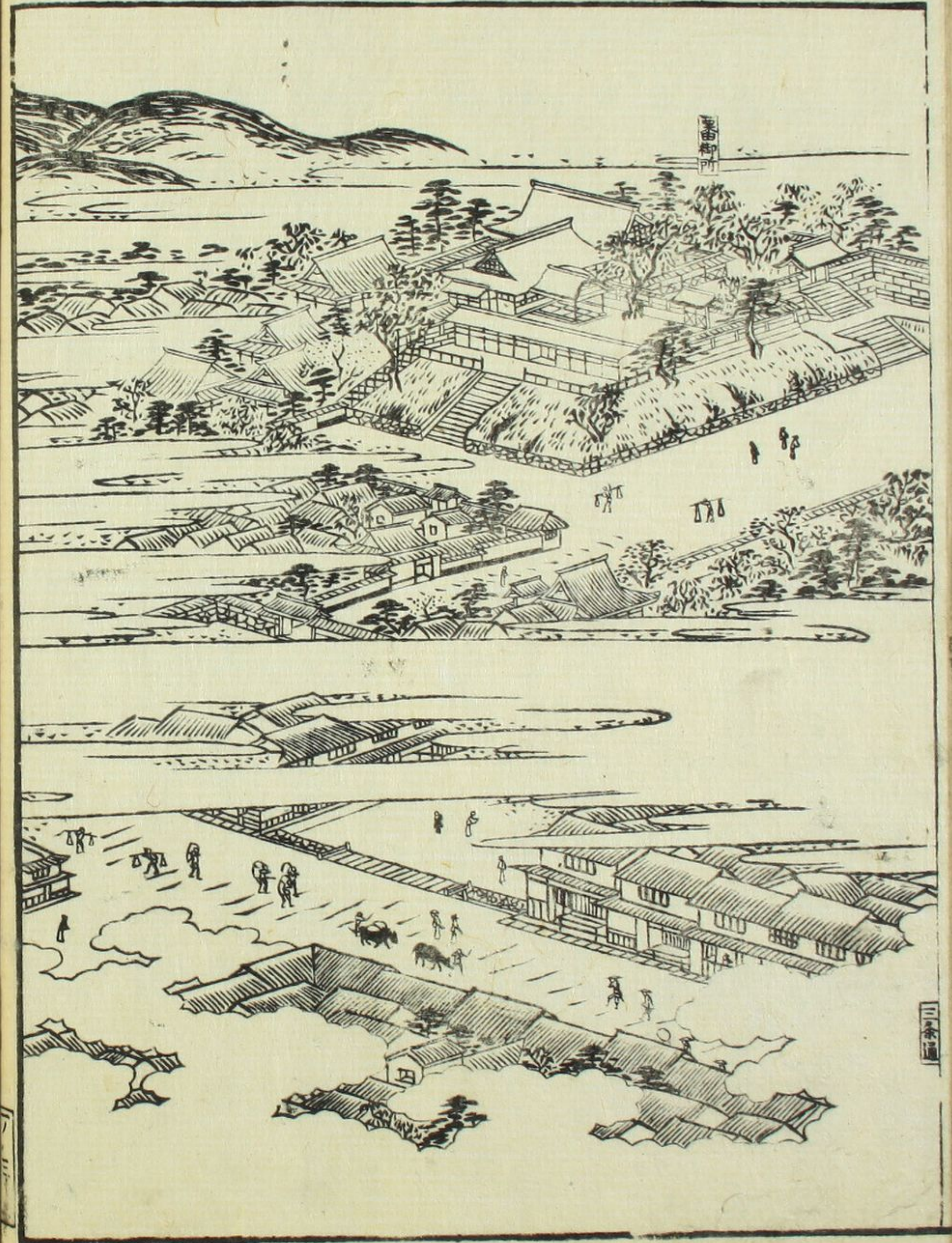
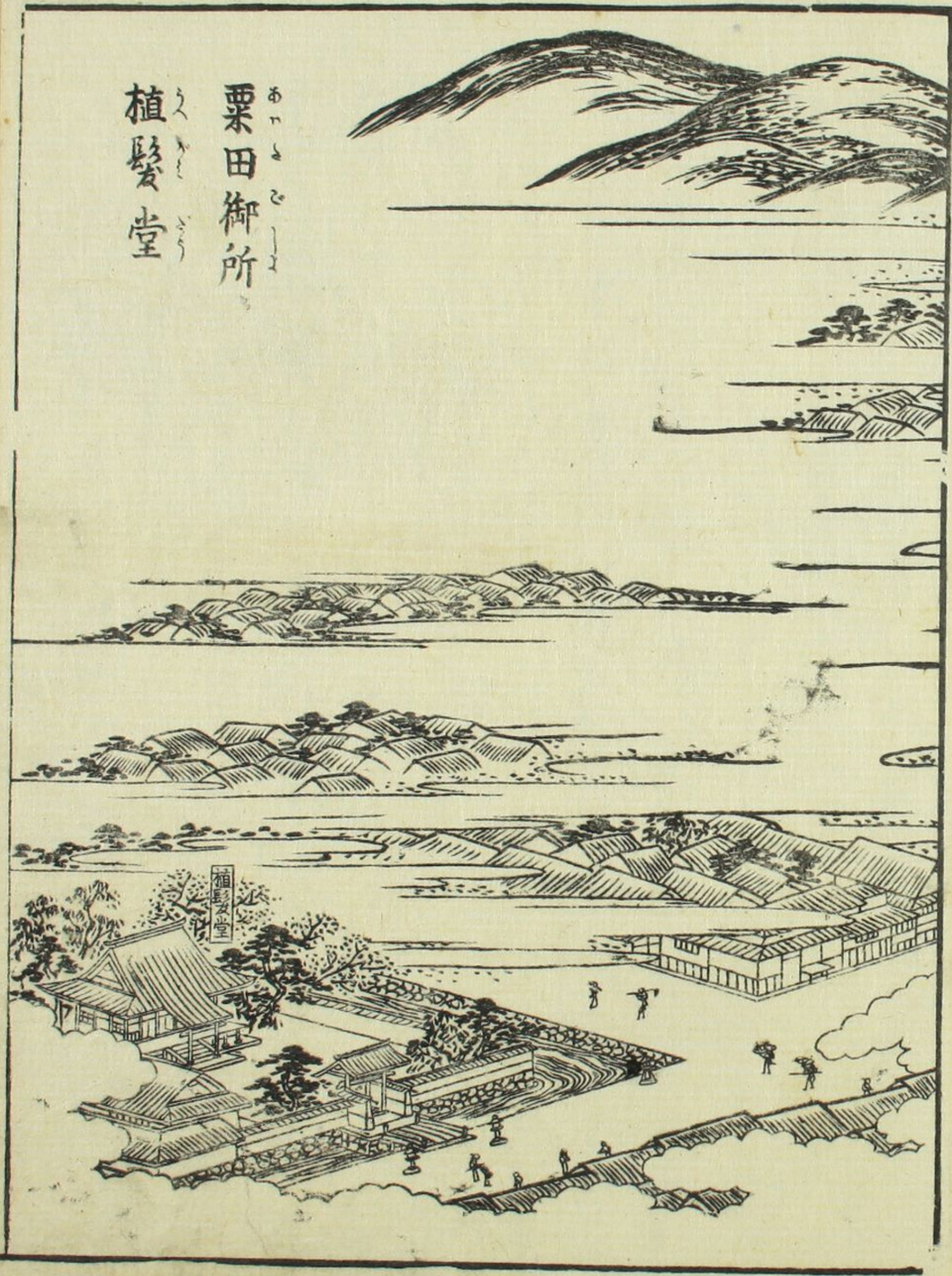
栗田御所

善蓮院門流と稱れ

此御所を姓古高祖聖人の御師範慈禎和尚の御院室なり
抑高祖聖人の人王八十代高倉院の御宇養安三年癸巳
の年御誕生はしつ御父の辰原乃ま姓皇太后宮大進有範
御所母の源氏乃武右八幡を即義家の嫡子對馬守義親の
姫君なりと吉光御孫とやまの吉光御孫とみ親世音

菩薩枕とませらと海と一子と授んこれとるつら西方淨土
乃徳化なりとくみ枝乃松とよへ終ふみ忽ら西の方より
金色の光明に「春門と吉光女乃口中又入ると看たまひ
そまより御身出るる御懐胎又けらせらと月光と御
男子御出生の御名松君と名つけたる二女と御神言り
南無阿弥陀佛と唱へに案の御附二月十八日夕に
まて佛の形と化せしとこれ拜し終るると敬又凡人とて世
せざりたり此事實委しくは卷傳又見へりかたのどくあ雅
き御姓得るれば興法乃因うらにきと利生の縁外又僅し
終ひて既又人王八十一代安徳天皇の御宇養和元年辛
丑三月十八日御年九歳なりとけ院室よ来りて慈徳和尚
の御弟子とありとどり此児發と利拂ひ範宴少納言乃

栗田御所
植髮堂



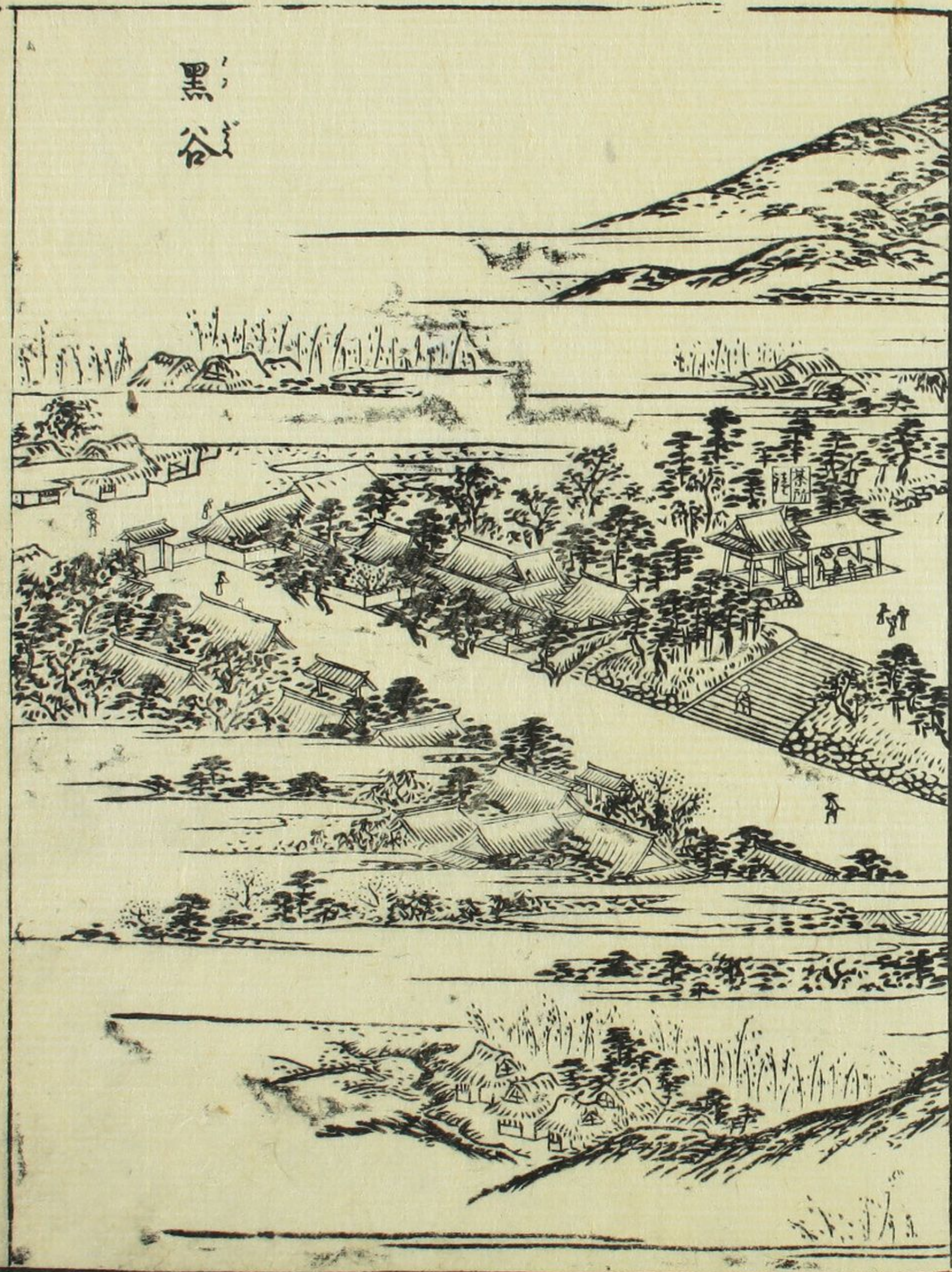
軒の月の影にて鴨の青信の物表と見えしは
既み六十余歳なりし河津洛の砌九條殿より河津渡り
て五條西河院の河坊と兼帯しと安み通ひ住居せし
たりとあり河境内は聖人朝夕みせ給ふ古事なり世
少納言丹戸と稱するなり

新黒谷

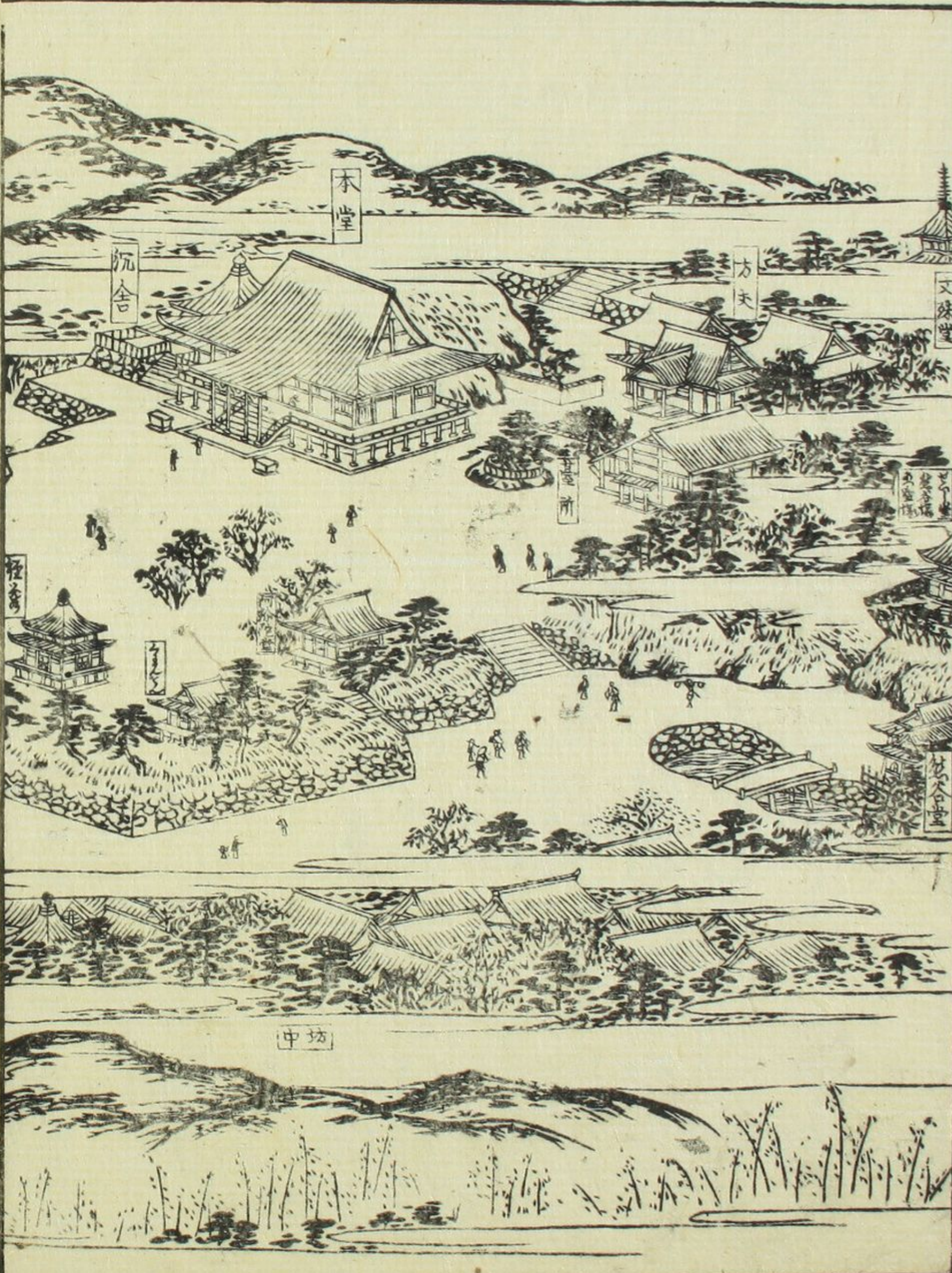
紫雲山金戒光明寺と号し法統上人二十又歳なりは叡の
黒谷山出く諸寺諸山を巡り名匠知識と見ゆて諸宗の奥
儀と免れ河年三十三歳永元元年に月の日より近衛坂より
不又草庵と給ひ閑居して一切經を教返披見し給ひ安元元
年乙未の年に十三歳なりと津去門に入給ふと諸僧みんえ
たり別近衛坂の庵室に今け金戒光明寺なりとや

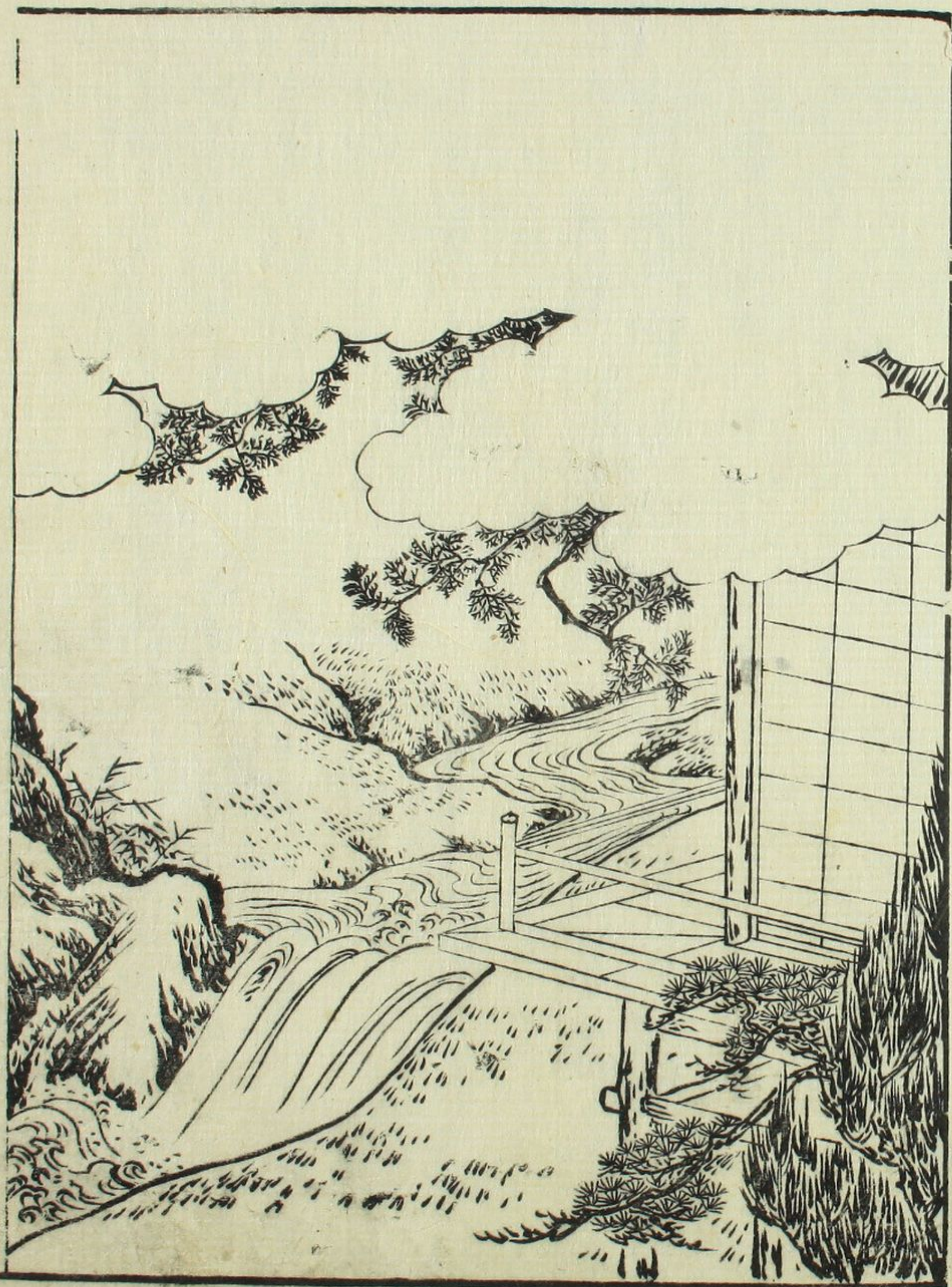
法統上人にしてるは靈地之且け新黒谷阿弥陀堂に親鸞聖人の
像と安置せりされ而上人を遷の河身と西海山越く遠く別とせ給ふ
河津若く河別と惜ませりと河容貌と明鏡又号し河は河自身乃
河津安をさうし彫刻を記し河記念としてたけ給ふ河教は
て法統聖人の河本像に佛光寺に納り親鸞聖人の河本像に
今黒谷に傳来せりと則佛光寺の縁起み見へり山の頂上
三重の文殊塔あり中置元祖大師の河身なり右の左に
徳谷蓮性坊を美敷盛の石塔なり文殊塔より小細ありて
其如堂（外側）より日中紫雲菴あり右に紫雲石より入れ
石あり法統上人の小まきせし石より右に紫雲
石のあり河房室より上又鑿跡しとあり尚其如堂と黒谷
の界又若乃近衛坂の形とありて凡そ

黒谷



本堂

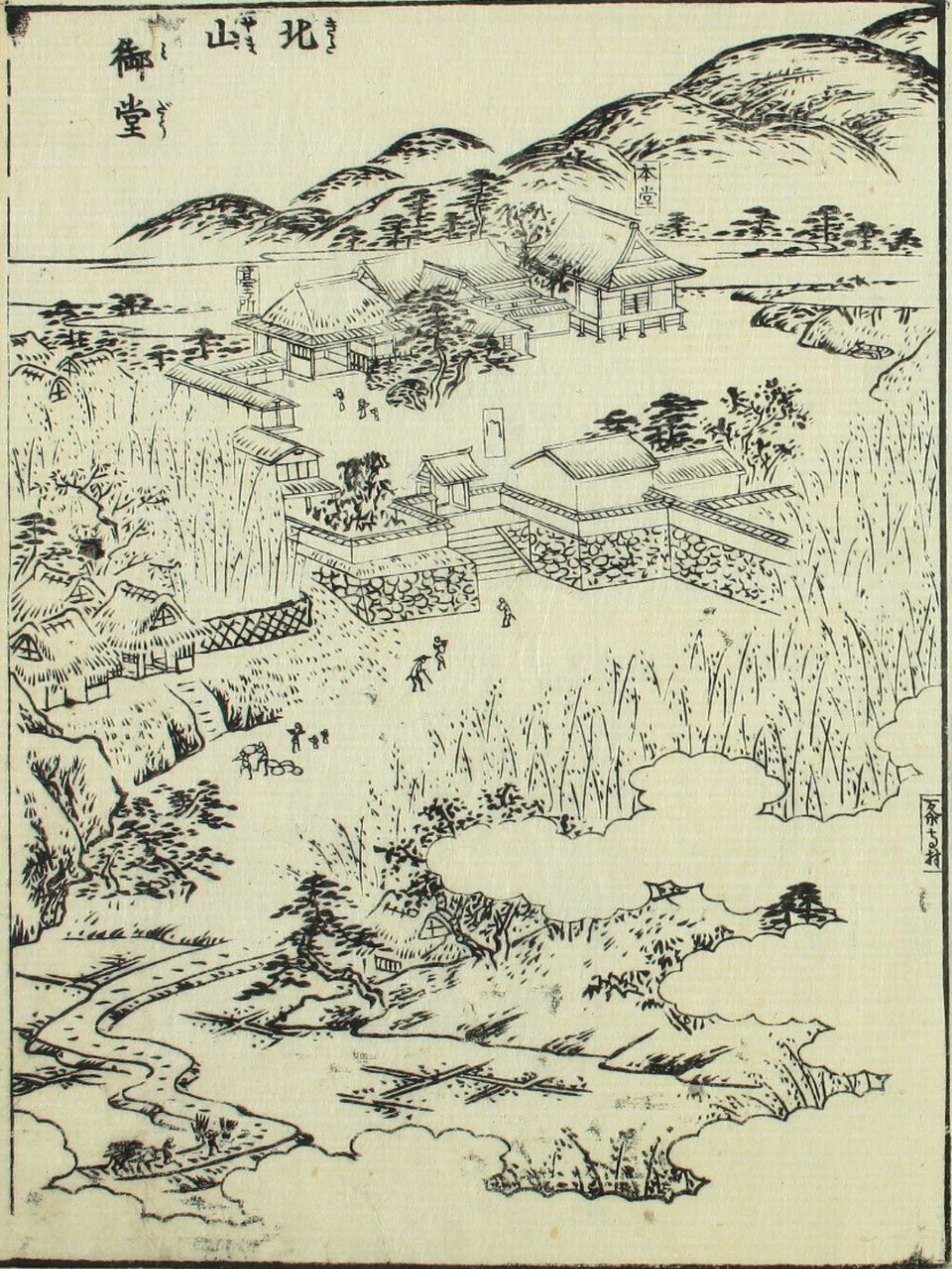




小山御堂

一條寺村あり

比叡山雲母坂の林藤修學寺村よつぎる村之西本願寺御抱
 所往古の舞樂寺と名づけしが今の信好寺と号しけりや此寺
 其昔高祖親鸞聖人比叡山上より雲母坂と歷て洛陽六角
 精舎へ百日の參籠し終る時毎度此寺に立寄せ給ひ堂の板
 椽及び御腰とかけらば体らひせ給ふ古法之則堂乃左の高き切
 岸より細く流るるあり聖人流しき山坂と通いせしは御息
 の切らんともふくみ立寄御多にむとび飲せ給ひけるあり此
 水を聖水と名つけ山号と聖水山と唱へる其側は石あり是
 を聖徳太子の教向石と号く或時聖人此山水を喝を止
 め給りんとく立体しひ押しけりるふ忽ち十又六歳身と刀を
 童子け石の上み臥してくわく小聖人衆生哀愍のころに



聖水影向石



深く日、れ若惱さそり」と推量ひぞや今悟心ざしとをけ
 まし終りし狀て大觀成就ありし我の聖徳太子とてその
 優劣失終ひたる人友と是と親白石といふり

赤山明神の巻居卷 西坂幸あり

此街の親鸞聖人卅年二十入歳去蓮院より比叡山へ歸ら
 せ終ふ附け而して藤一き美女又値せ終ふ又彼美女聖王人へ
 女人海渡の義を問答し天日乃玉と授け終ひ忽ち隠れ
 失終ふこれ觀世菩薩とて扱はしつるといふに卷傳又
 見えたり

○赤山明神の素盞鳴命の垂跡あり赤山の漢土より泰山府君と
 其のちの各々慈光大師入唐の附け終ひたるをありし一傳朝小附
 其のちの各々慈光大師入唐の附け終ひたるをありし一傳朝小附

比叡山大乘院

雲母坂五十丁根
 中堂より十八丁余

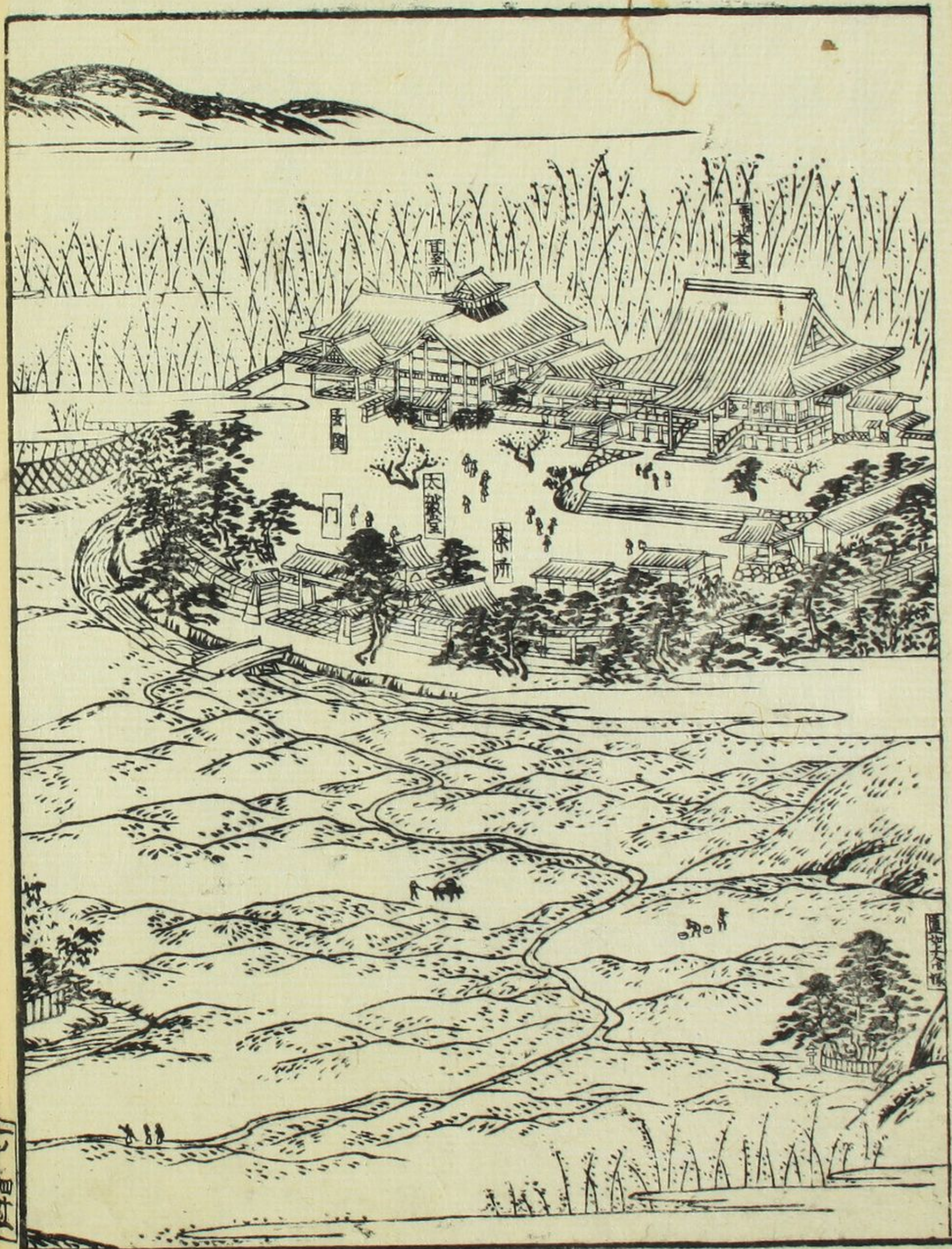
南谷無動寺の坊舎又一系院と号し慈真和尚兼帯の
送臥し親鸞聖人九歳の春乃以慈真和尚の御弟子と
あり二十九歳の御年まゝ御住居し世終ひ南岳天台の
玄風と學んで弘く三親佛系の理とわきまをこじらるる
嚴横川の流を汲んで泳ぐに教因融の義を達し二十年來
若修練終はしまゝ世に御舊跡之聖人二十入巖建久八丁
己年少僧都と任じ聖光院御門跡の御寺務より根本
中堂へ教百度の系籠及び六角精舎へ百日の歩をとこを
せ終ひしにけ寺を御せり世の御のり之に委く六角寺
威御自他に御本像と此寺を安んじり系清の諸人去足
を拜し安んじり人あましく堂の右廣極を安んじて常
み戸帳と用き拜せり御人又安んじり聖人御美年名

御不離の奉るをまゝ西塔に聖人御建立の御舊跡
あり横川山乃奥に若教生石と云ふ大毒石あり三塔順れ
の御者と悩ませり聖人此石を祈りお碎き終ひして
今も其舊跡あり

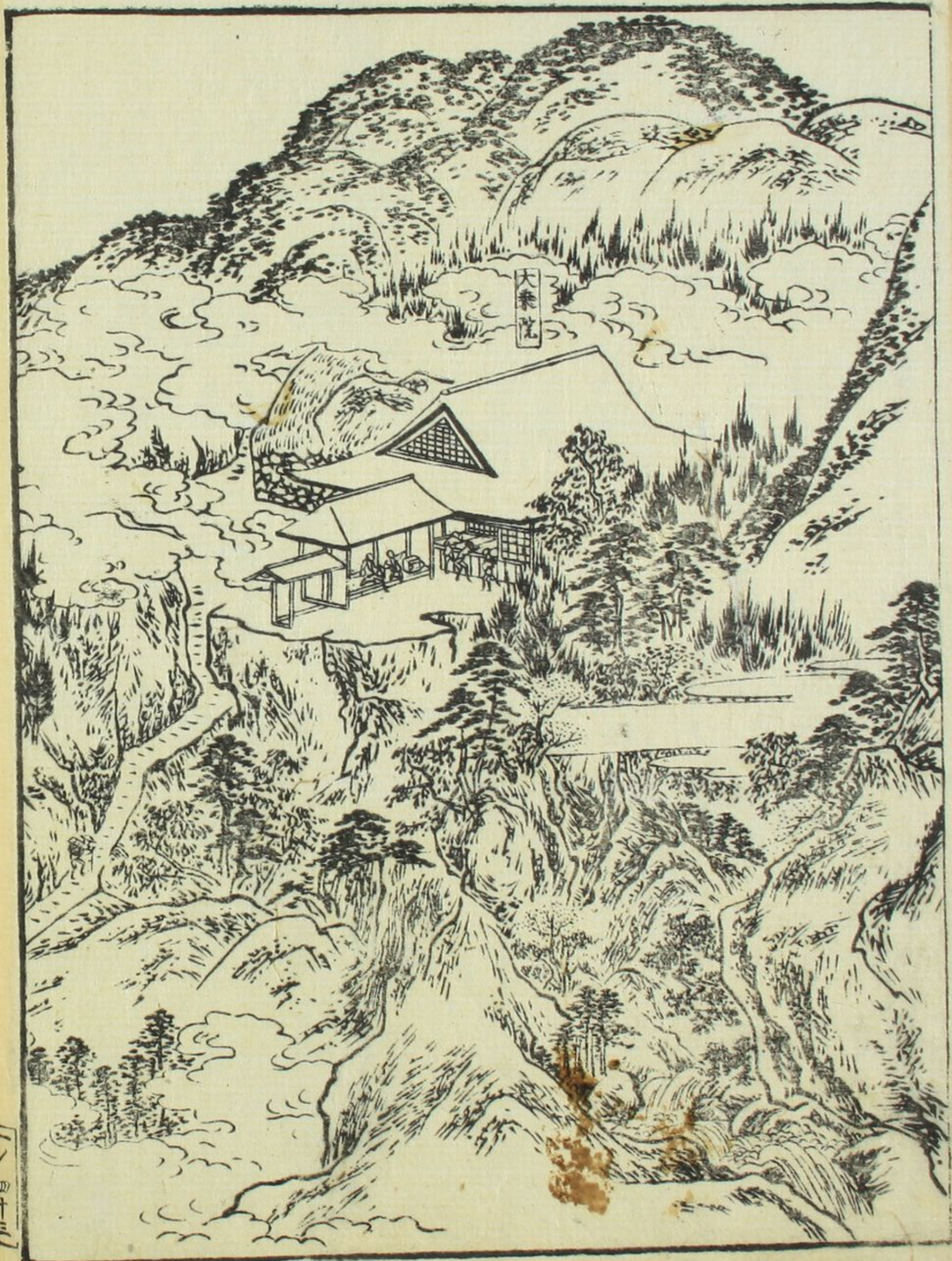
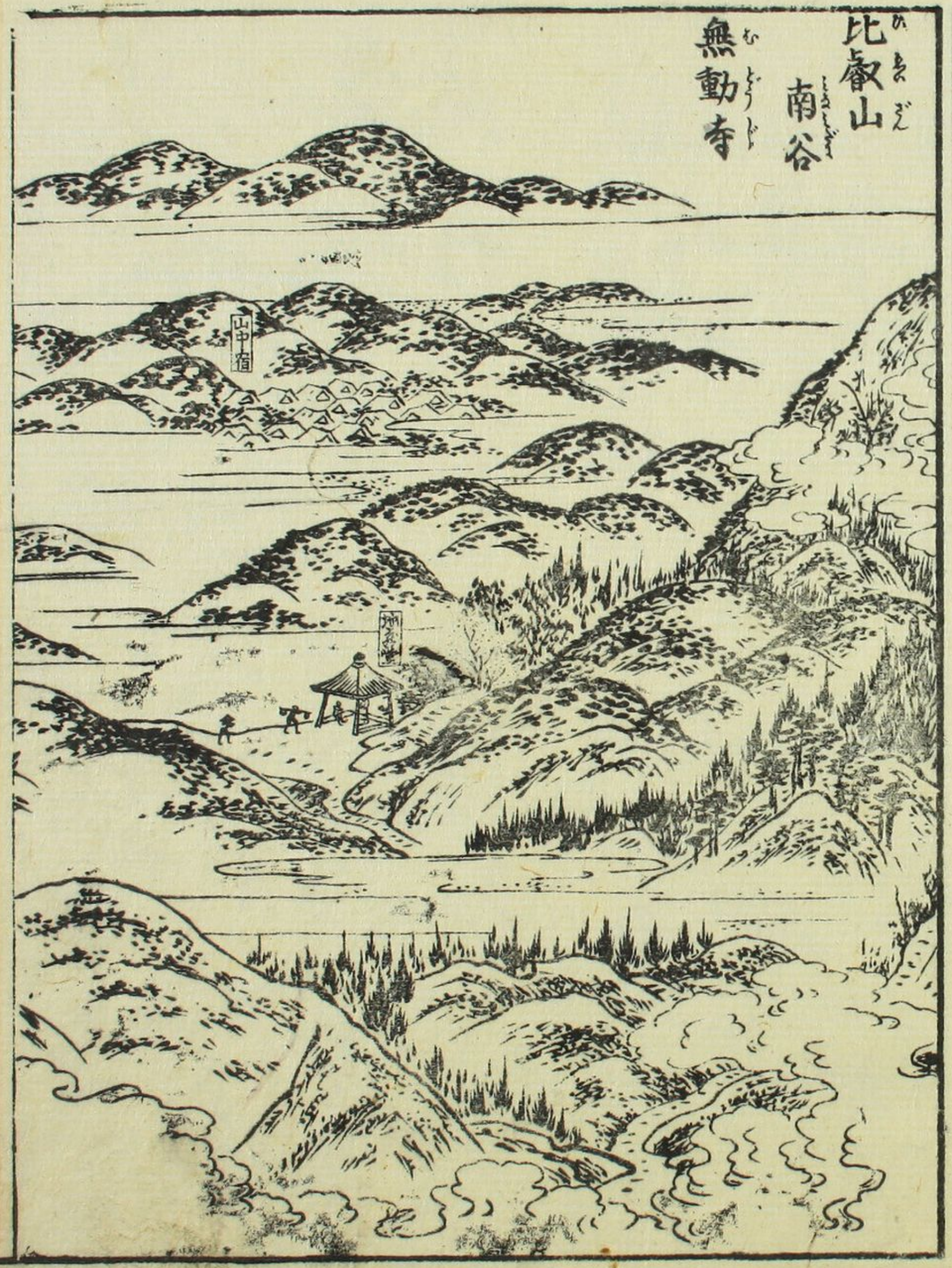
○此山延暦寺の八代祖天智天皇の勅所として延暦七年
教大師の御創ありし靈山なり二十二代醍醐天皇弘仁二年
戒壇院と御建立し御寺と延暦寺と稱へし其の号に二条止観
院と云ふ御中寺の御寺なり其の御師如來佛教大師の御住持
親御年瓦如來と安んじり横川山は給泥佛親世若法守の山王
権現二十一社の東坂中寺と稱へし其の御師如來佛教大師の御住持
して都都平安と御寺の靈場あり

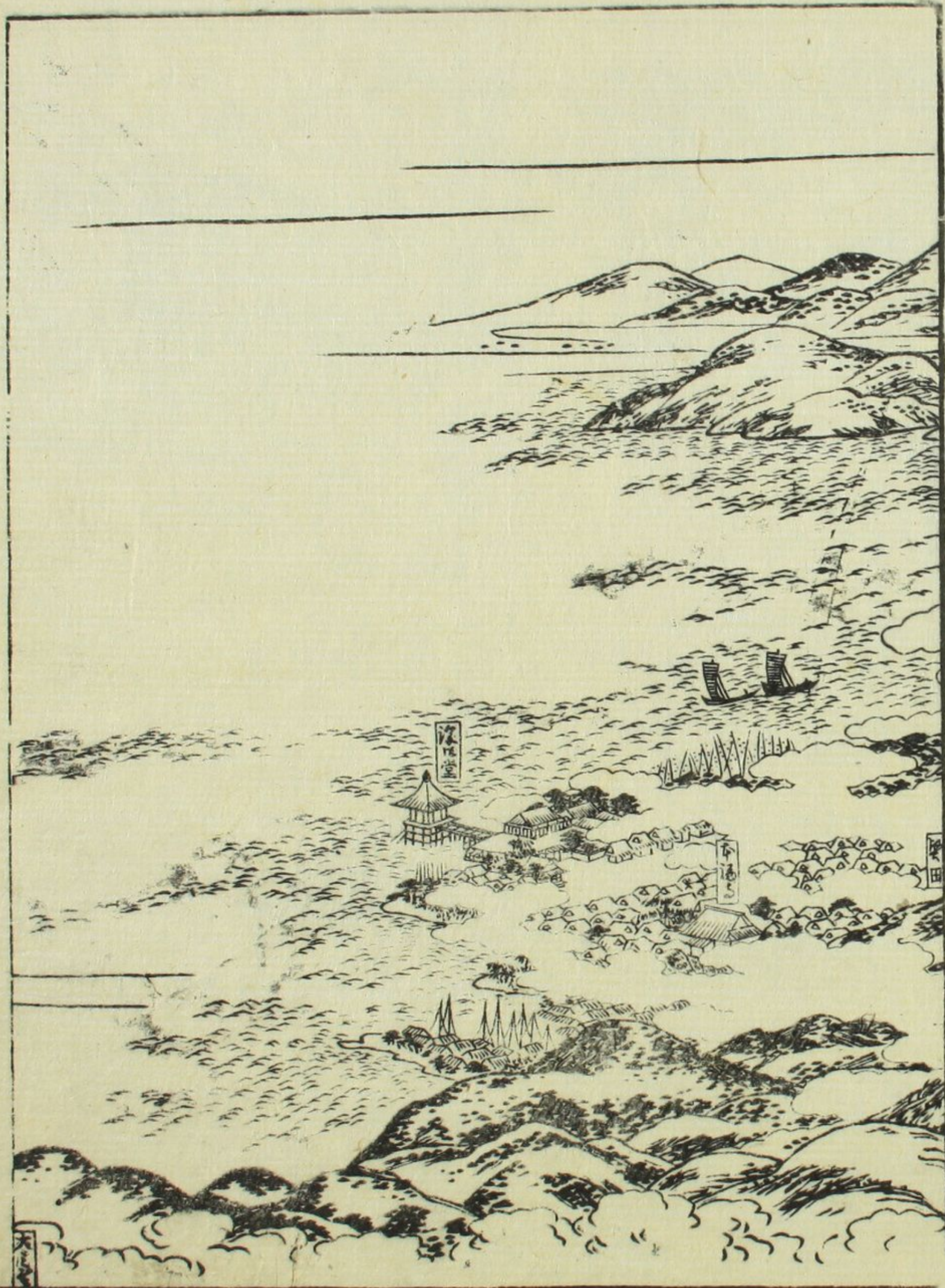
山科御舊地
此より以下河内流御師の御住持あり其の地と云ふ山科の地なり
御寺の御寺なり其の御師如來佛教大師の御住持あり其の地と云ふ山科の地なり
御寺の御寺なり其の御師如來佛教大師の御住持あり其の地と云ふ山科の地なり
御寺の御寺なり其の御師如來佛教大師の御住持あり其の地と云ふ山科の地なり

山科
御坊



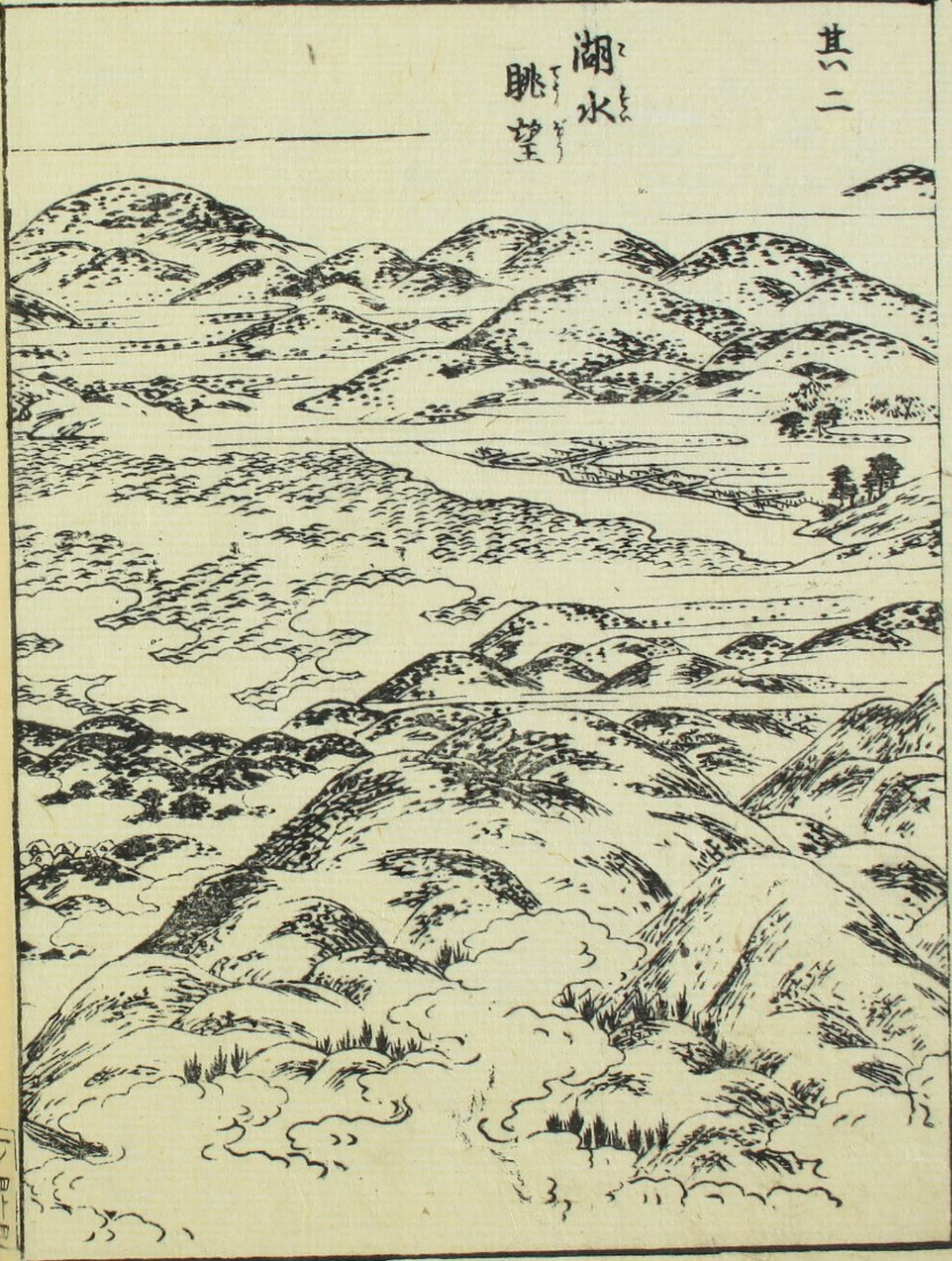
比叡山
南谷
無動寺

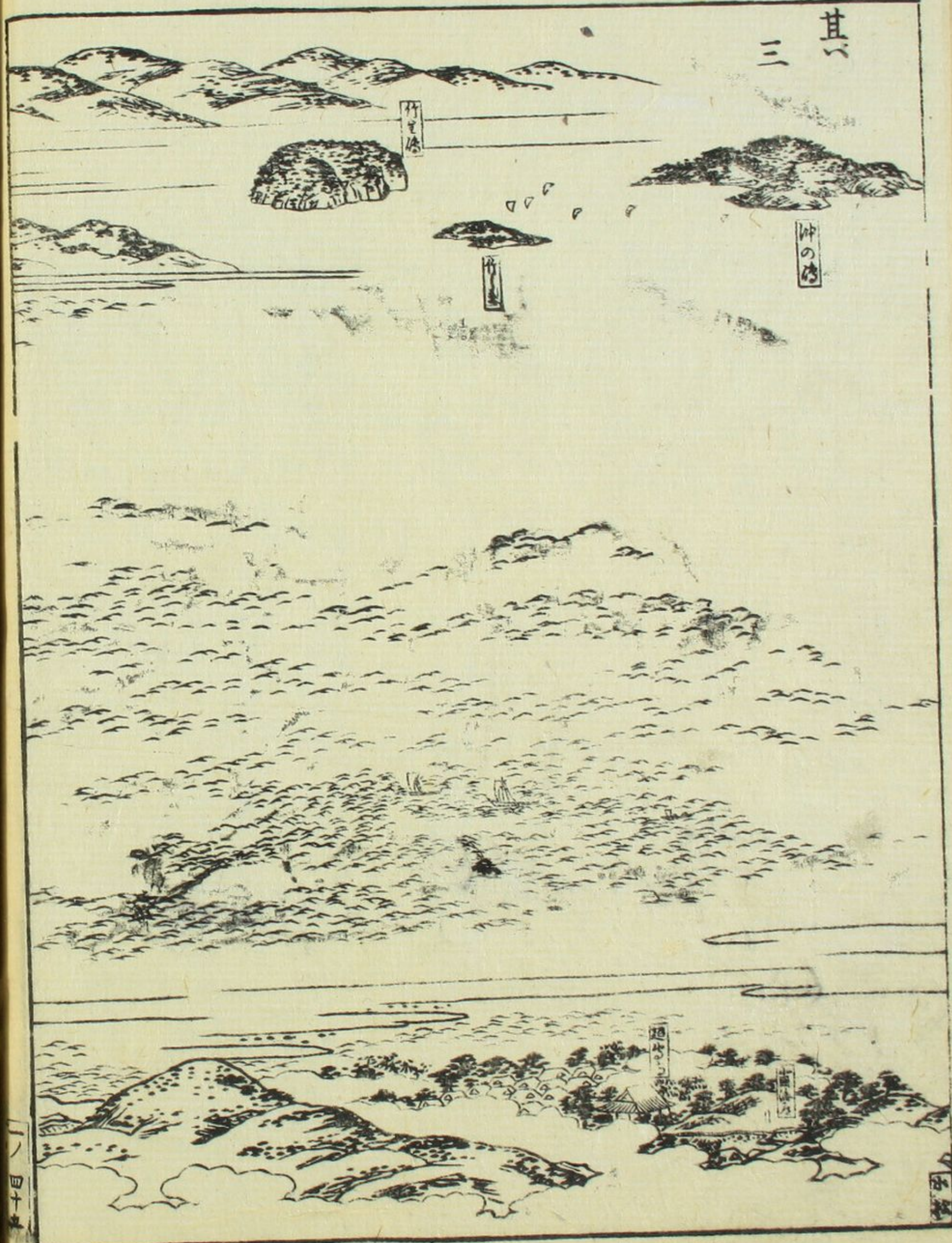
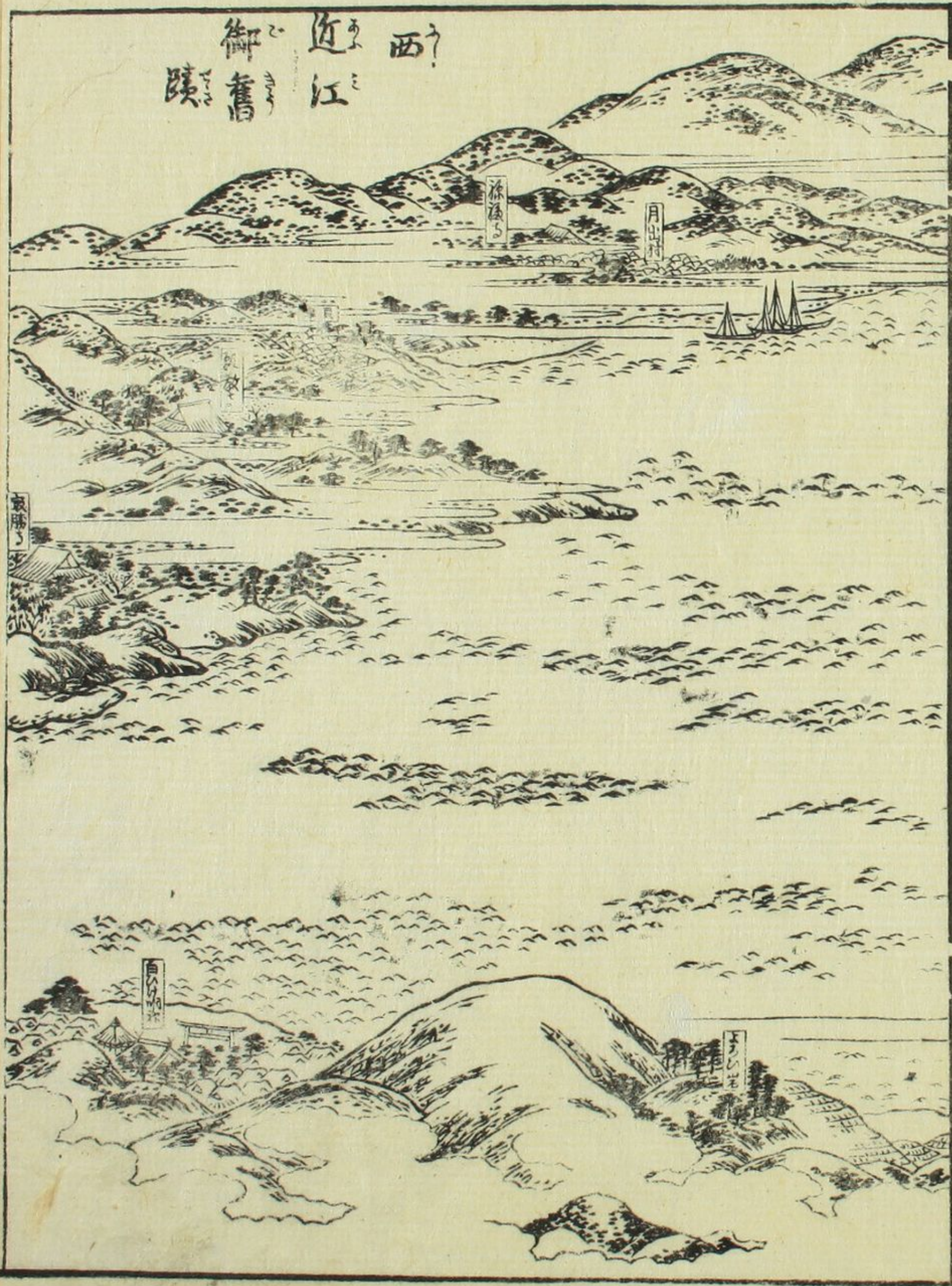




其二

湖水眺望





三舟の鐘をかりと里信のつひゆり八幡長根長渡るといふ
湖の東につらかり山道はふりてい志津嶽余若の海ありけ不
も豊を園いまこ相築流を守りし附柴田勝家と討凍ありし
古戦場かり柳原中河内と戦て誠若にむる塩津海津の湖あり
水源を誠若の畧に滞りて凡湖ありの名不田次志く誠若とらふ
てまわりて今もまふは聖人の河田松二十日輩の巡路にけき
古歌名不又凡系乃勝地と書集むるといひ時てや渡乃
去砂の勢をれいれりるの多きりりり人毛と懐じりる
○志賀の里は叡山乃林藤湖水の源あり幸彦の二ツ松の湖中八
系の一ツもて世人名本と称せり

○坂より山の方衣川と流りて湖の口下平は柴田浦あり是又八系乃
中又ゆり系といふ方は「渡津堂」湖水の中又建て渡り
石橋と渡り恵心僧都の作り終ふ御佛を安置せり
○柴田の浦は蓮如上人の四法夕陽山は後寺といふあり山王宮祀の村
と小松と系一湖あり出て津奥の所也とらり系と渡り
り文「き例あり」とそ

去砂入にたき歌名所なり柴田浦去砂村あり
勢啼く去砂入江の源尾は尾波よりありり曲いり
比良乃多根乃白雪松「系」の二ツは体人志賀郡大物浦
「比」は比良乃とらり「り」は比良乃とらり

念佛山超専寺 西流

小の坊室幢院といふ常州下妻西本山光明寺より別とらり寺

ちく高祖聖人の真牙明空坊の流とてとらり又常州完戸

信坊の産と持て西流二十日輩の内第二十番ととも
○尚寺傳來の什物には○親鸞聖人御真像十文字名号○聖
人在上御給 蓮如上人所著 其外什宝多しといふとも思ふ

○大物館専寺より二里半小打抄り「村」は琵琶山宮勝寺といふあり
蓮如上人の舊地あり

○白髮大明神の社は比良乃山山の尾傍あり「の渡邊」あり系津と
後田をを津よりけ傍より湖水一面の眺見竹生勝多氣勝神橋といふ



筑摩
系乃
園



凡そ云々...
○に十八神村と云る所の側石佛あり、妙基菩薩の能るりと云ふ、
と三十三神と云せり

願教寺

東流 坂押内より七里山陰家 海津よりあり

尚寺ハ高祖聖人、彼後へ遷り、河内至りて、世終ひて、至其時、
真言宗とありしりと改宗して、淨土真宗と稱せしむ、
寺内又七百奉を經る梅乃古樹あり

朝日山稱福寺

西流

海津より三里、山瀬の邊、遠藤氏郡、
月出村あり、則竹生佛の所の方なり

尚寺も二十日輩又屬一関、東より乃引寺と云ふなり

此地に方又村あり、唯此一村のみありて、關隸の地なり、東面ハ湖水、
とて、吹志津嶽乃峯、くも遠、又乃南ハ竹生佛湖中、又福立
一緑樹の蔭水、を小流、風系、流又福立、乃勝地なり

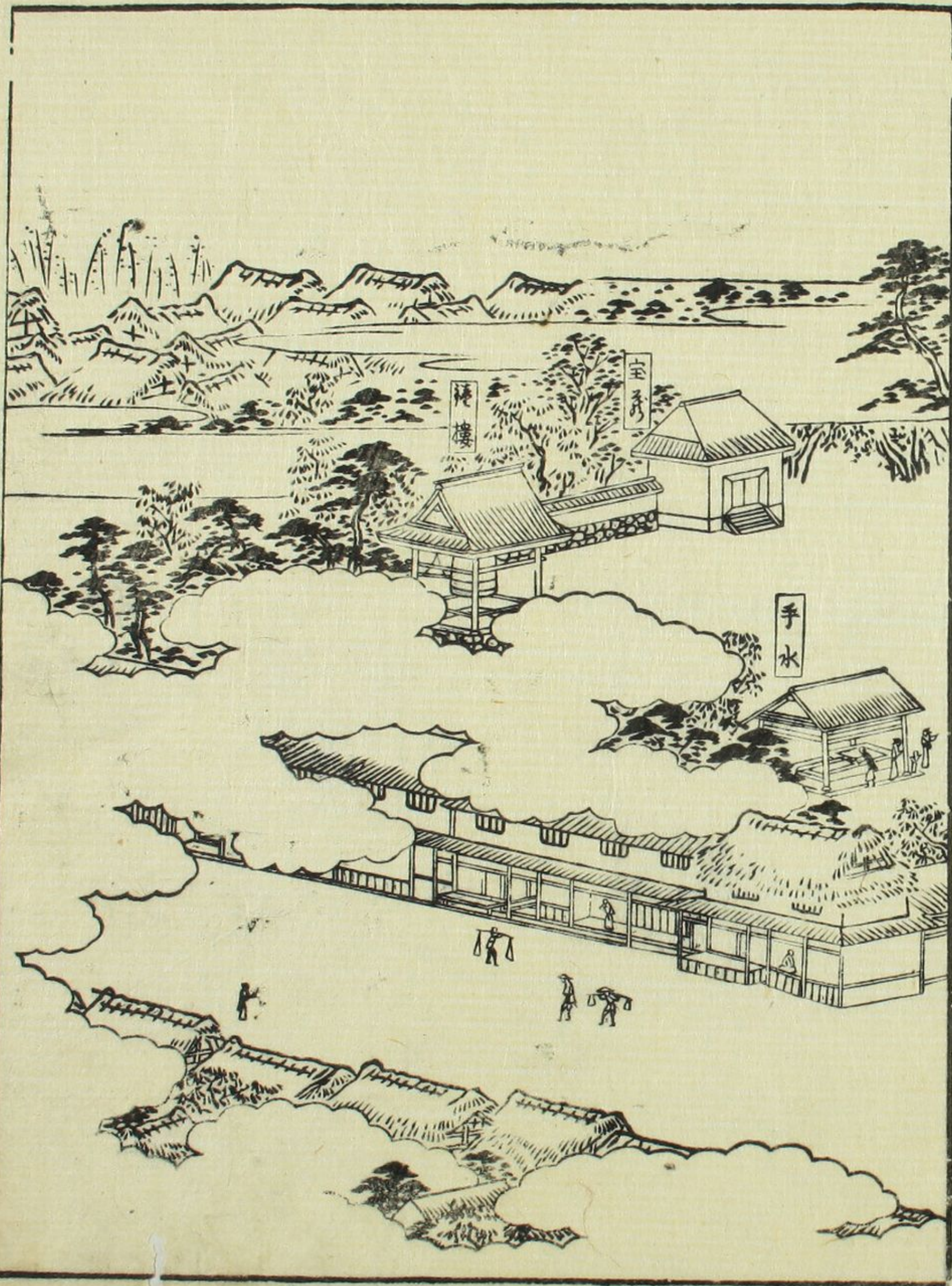
竹生佛ハ淡安郡の湖心、又ある佛と云ふ、水より六十間、より九十六丁、
奇石水晶、宝珠とせし、日本五、美、美の二つありて、流又不思、
淺の靈、佛なり

新天女と法聖、
近江の地、おけて、湖水、
忽ち湖中、又竹生佛、
皇十三年、淡海、
流るると云ふ、
ありしと云ふ、

○湖水の山陰、陸津の、ある志津、
淡兵衛、
○本町の宿、

長瀬乃、
正の、
山あり、
○後、

に月、
新、
つゝ、

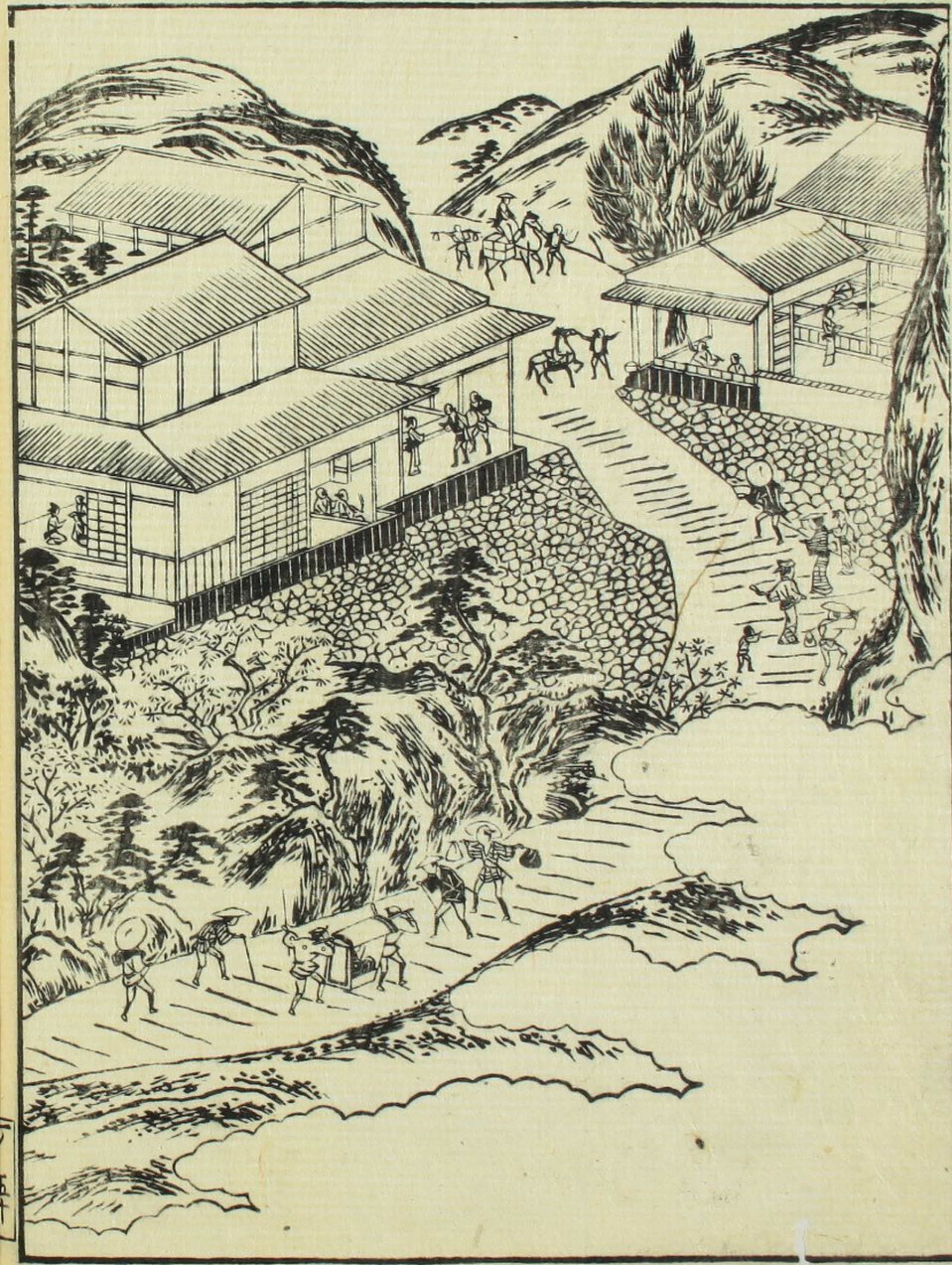


寺に 満え 宝多





播磨の茶屋の
 番場の間
 水湖一月
 見え風系
 言信よ
 雲一
 一



〇あふみのつゝきのあつてをせりつゝる人の猶のほどん
 表根のつゝの依和山つゝし地つゝる尚附寺修慶の所城下つゝ
 野原の地つゝる表根より東に河つゝりて多岐の所あり表
 根丸はるの石物なり
 〇まの天の表根の東南大上郡あり修慶命とほひま
 〇聖智川の高宮と武佐との間の所なり
 〇石川つゝる河原のまのあつては表根のつゝるまの世や

室満寺

東流 聖智川あり
 源家

〇室満寺 西の方寺 修慶寺 近松寺 あり尚舊跡の所流るれは興
 池と云れは近の國中より河内流るれは表つゝりて修慶を述るれは
 流るるは寺号と修慶のつゝるなり
 本堂十一間に面する阿弥陀佛の安阿弥の修之尚寺修若の真
 言密乗の寺ありしが高祖聖人御降臨の初尚寺より止るはしく
 法延と開き修之より既よ本宗と應し真宗より改り今つゝる百
 年来移修るるに靈場なり

廣滑寺

西流 武佐の南あり

此寺も聖人御降臨の所開闢し修之舊地とつゝる
 西方寺 佛門跡御坊八幅あり

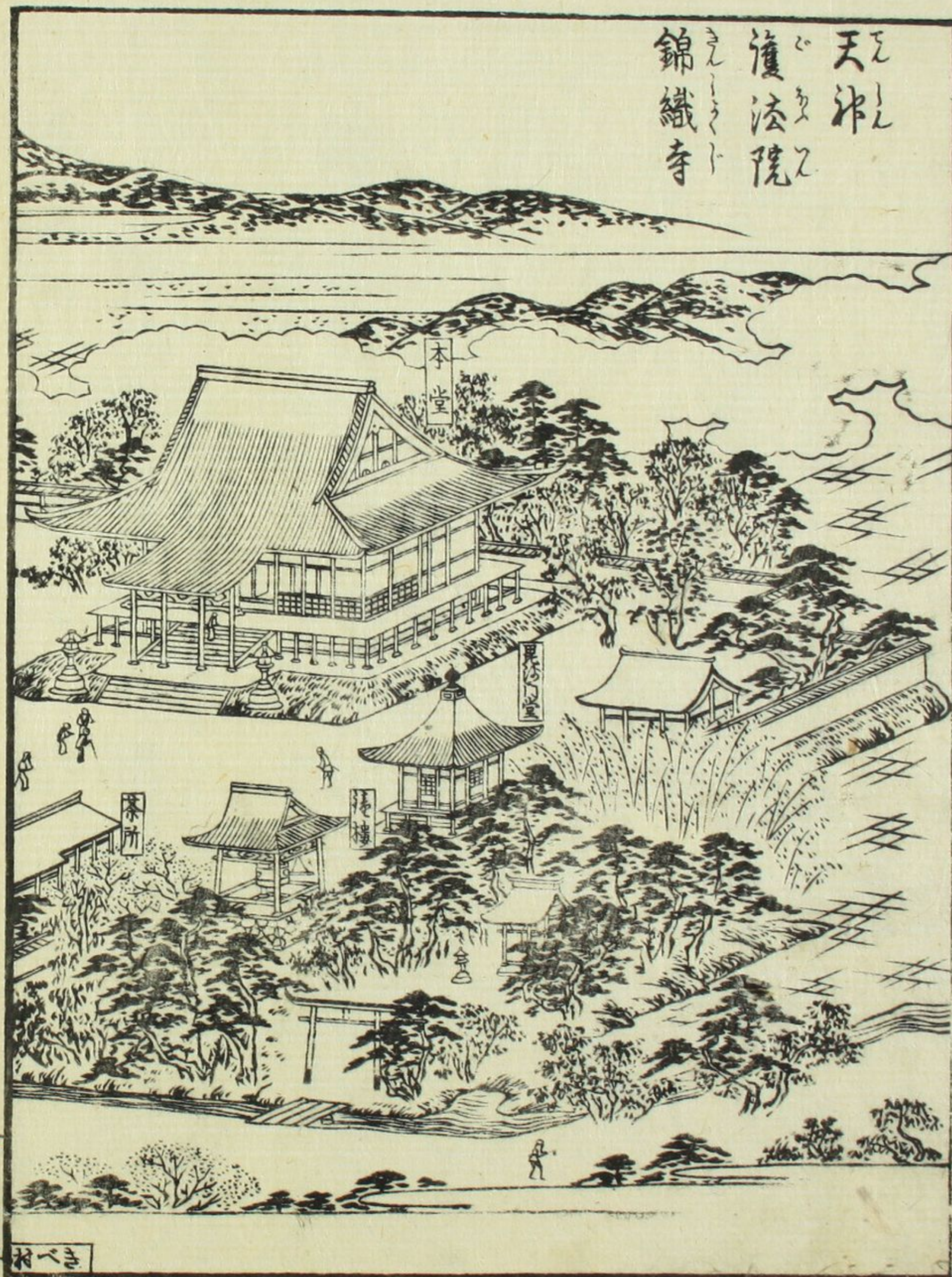
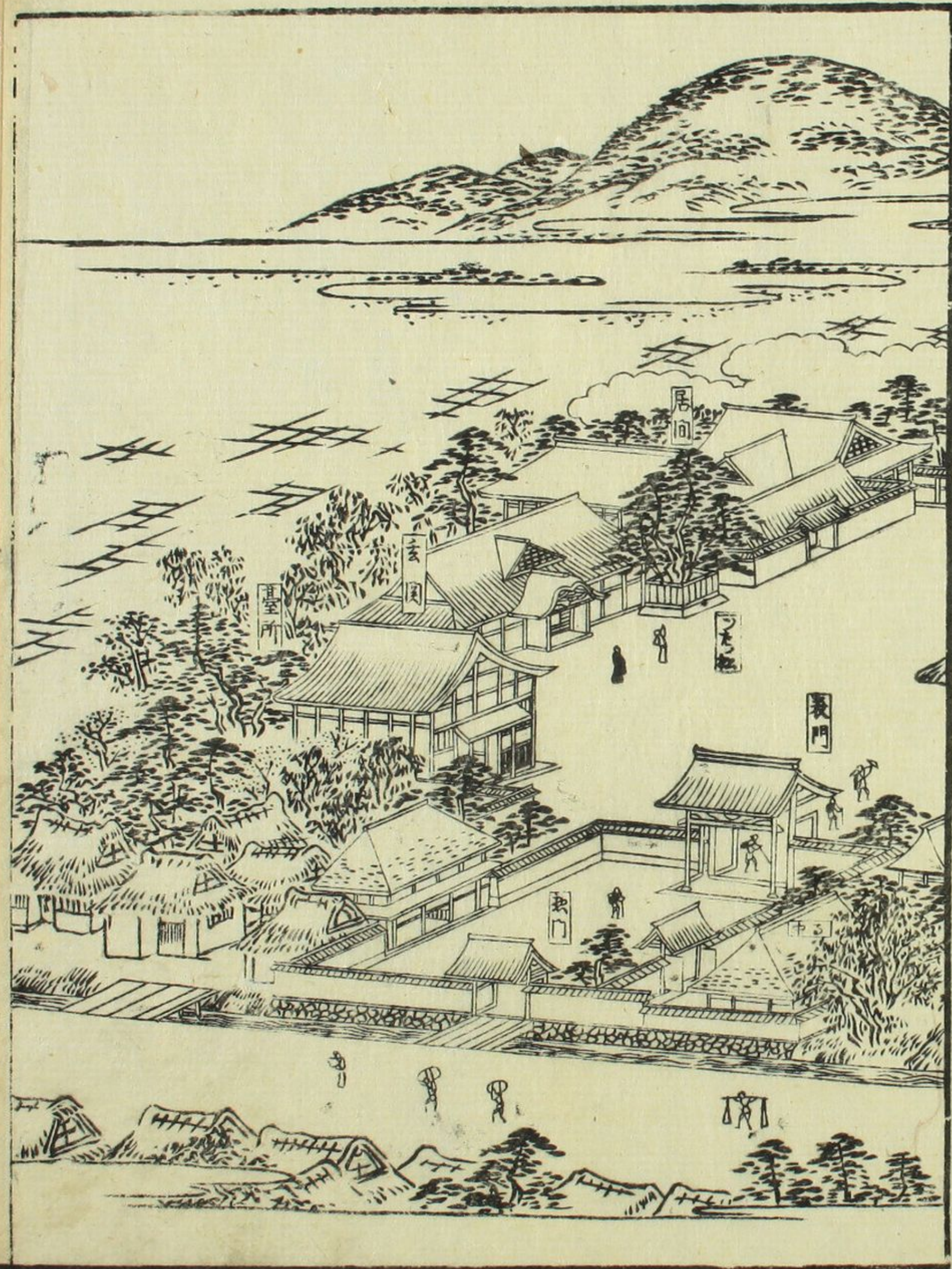
二十に輩身七西念法師の遺跡あり本堂十二間に面高祖聖
 人真他の影像と安直以靈宝教品を畧し

〇武佐より一里南流の南より各石の積山あり黒石の跡
 〇山つゝるつゝりて見て修之修之なるる老やまぬと

天沖護法院錦織寺

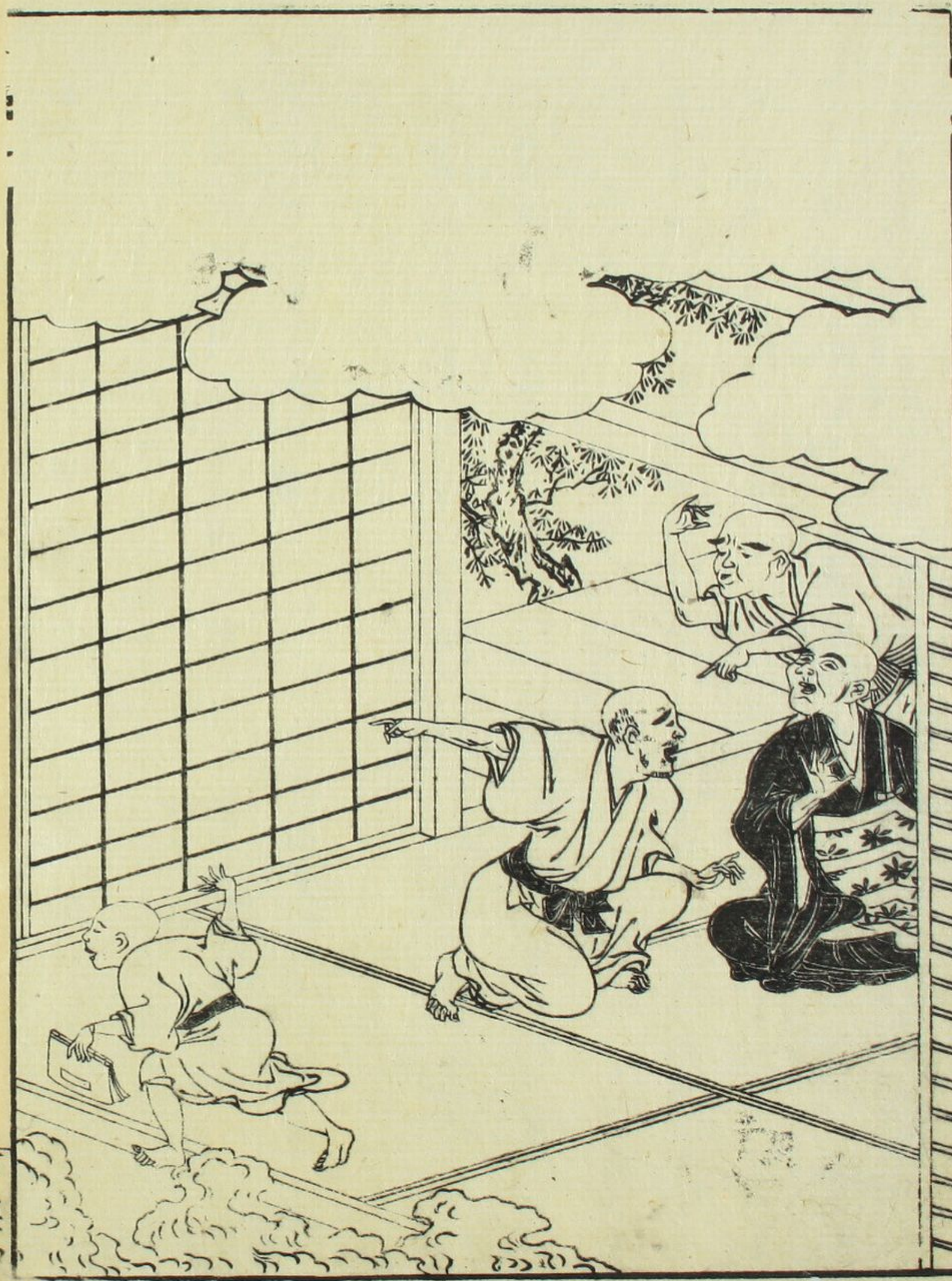
〇天沖郡本郡より河内流るる表根の二山中寺修慶上連つて別
 僧正に任ぜし河内印地あり 修慶坊舎六區

本堂十間に方なる阿弥陀如来天安寺より多岐天の像と安
 直以尚山の濃徳の嘉禎元年高祖聖人御降臨六十三歳御降臨
 の所時に月より八月までつゝる此つゝる御化益教存しつゝる
 靈跡也抑聖人諸身と共よ三州尾州濃州を化益しつゝる月



の以爲國に後此郷に來りて終るる日と曉法及及びのりが安
み一宇に堂ありて多聞天王乃像と安ん聖人怡然として満身
と共此堂に寄宿し終る其疾乃又及及んで多聞天神聖
人又告終り今聖人後の中安ん如來乃像と此堂に安ん
專修念佛の法を説終るに遂に我れこれを守らんとて安んた
まに終る此郷の安ん石鼻民郡夜未明又安ん奉門に聖人と拜
し終るけるを多聞天神告る者想ありしををかへり
聖人の感に終る御告と符合せり安ん抄いて石鼻氏大少
聖人と信敬し力を盡して禪房を營み如來と安ん聖人を
奉るる世尊のどくは聖人又附と得る化益と播し終るる
遠近に播し同年八月に終るる聖人一先入洛し終るる其
後附終る性信坊若性坊等かまろく尚坊に奉門て教奉る

つる天祚地祇と感し終るる少や曆仁元年七月六日の夜
天女天降て綿を織るに堅三尺横三尺あり濃く妙色嚴
然として言語を絶する綿之貞永の帝聞るる所の敬覺
又傳るる天感み餘り竟る宸筆を下して天津護法綿
織寺の額と賜り勅願所と成し終る天安堂に安ん身を
多聞天のる像に天台山傳教大師の彫刻し終る慈覺大師
又附屬し終る慈覺大師け一字と造立して天像と安んた
まに終るる○奉尊の如來に高祖聖人常陸國に附化存在
ませし附日國霞が浦の海中より大なる光物を著し終る
輝き里人獵師等甚怪し聖人又是と告るは聖人彼所より
て看終るに保し終るる金光明地よりある正安靈佛あり
在まるとして里人を集め大綱を入る彼光物と引とさせ



て見ゆ人の正は是妙色澤嚴なる阿弥陀佛乃る像をそお
りたる聖人たみ教ひ尊重恭敬して御身を放し給ひ
常々後の中は安んじし佛とぬし給ひしが多聞天の告命
よりんて當堂の本尊と崇め給ふべき靈瑞殊なる事しと
りとも悉く記し不道山第一の靈堂なり

○高祖聖人満足の御歎聖人五十六歳六軸の御本書御
制他畢て御歡悦満足乃余り御自画はし給ふ御教を
御満足乃御歎と稱し元派七年八月八日山の堂塔後
ら次回遷せり其時此二尊像も焼失し給ひぬと云ふ事
と後て後二尊影火燵の中は安んじし佛とをばしてはし
甲より少し傷らと給ひぬと云ふ事と云ふ事と云ふ事
院内は老松あり茂松と号く彼若聖人安んじ給ひ

一附け松は安んじ給ふより則松の名とせり。聖人御
後御直并御孫等より多く寺務し給ひ存覺上人も當
より給ひ其御息綱嚴僧都寺務あり中真にせ給ふと
かん圓へ一靈堂教品畧と

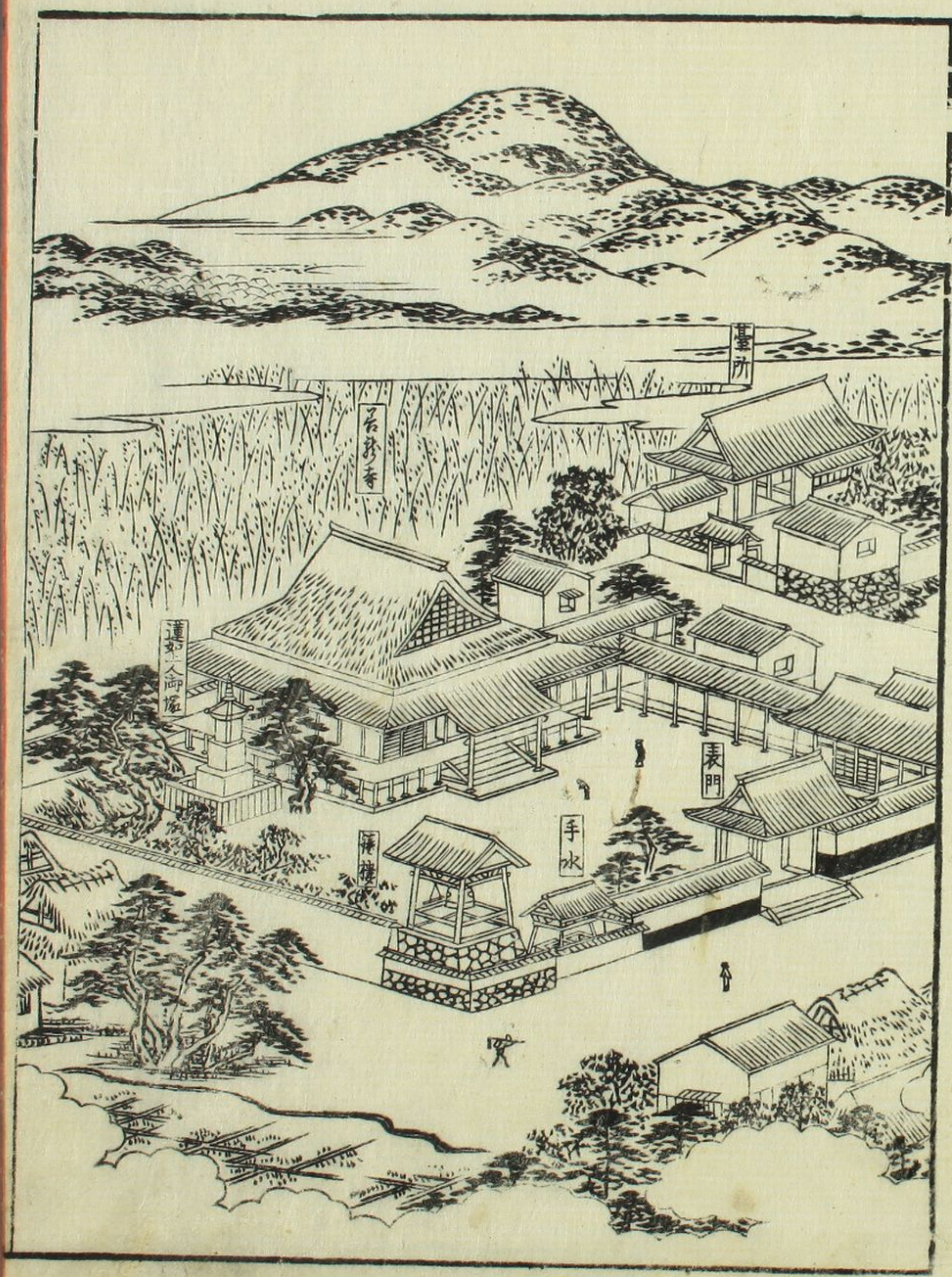
○本郡村より一里半むより又令が森と云ふ村あり蓮如上人の御并子安二
の信者と号へ一道西入道の坊法あり若狭寺因宗寺と云ふ

○令が森と云ふ山の西の方より守山より一里半に及津の御あり森
の焼が解りけり追かき夫橋の邊へ出たり

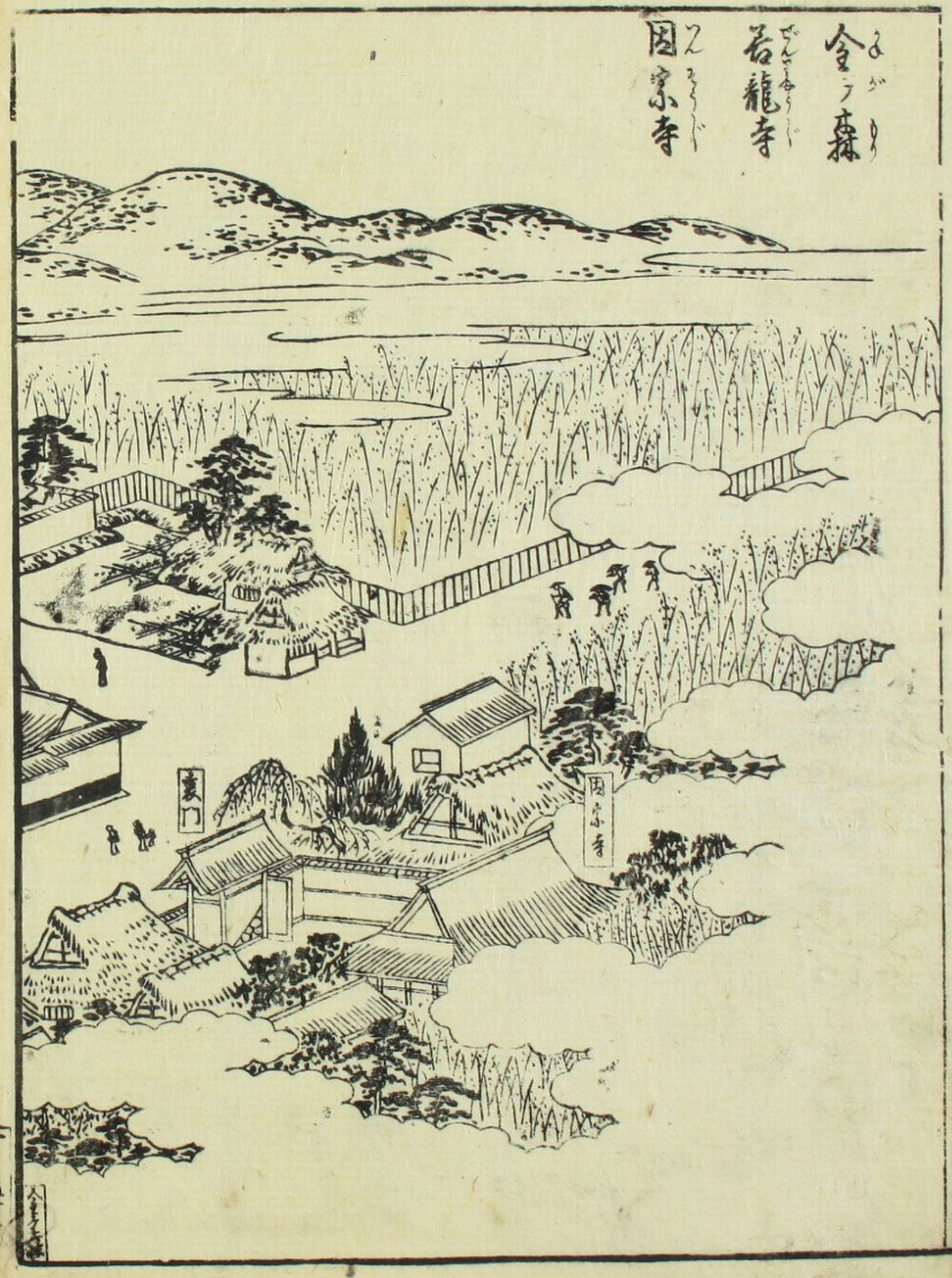
○夫橋より海と一里の邊へして大津と云ふ湖水八条より一ツ又川をたせ
川と云ふ御のあり

長居せはをしてあふと引夫橋の川乃邊のいとい

○夫のせのあに瀬田の西瀬田の長橋あり長と九十六間橋より花乃
方と云ふ彼家玄都が源氏五十に胎の巻くとつて石山寺あり
えさうみのうらぬ橋谷へ居てまの河川へある小橋あり長と三十二間
右の方湖ありをき足後一帯は是に述はし湖中洲の御も遠なる



今が森
 石龍寺
 因宗寺



橋の板も苔むしけり
石山寺の誓文天皇天年勝宝六条勅して受領ましくりて
て中なる黄金の親世善の良希傳正の地石山上下の風景奇樹怪
石蟠曲として流るる世外の勝地なり

柳田の小松原に三丁斗松原の石の田の中より本曾麻の腹心今吾郎
兼平が塚あり

栗津原に所あり即本曾義仲戦死の古跡なり
うゝゝ其塚あり

打出の渡り大津よりまきなる渡迄之天心年中明智老馬依不より
馬にて幸傳へまきなる方なり

大津の歌の志賀郡よりまきなる渡り教子の商家交易と此
往還の旅客絶る期にしけ津村ありて旅客の憂とくらぐむ

湖中へ橋とる船と源五郎と秘伝むし源五郎とる橋
か源ぞ一奥の極め佳しくかくつらうしるるも又其の以てまき

船の味ひ美しく夏に船とつらをよまきなり源五郎船とる
るよしとけり都て湖中へ得る産物多し
鞋矣 鱒 鱈 鮒

經 船 經 其外雲田浦より小糸船ありし船の背ぬき船を知川の
ろと津田船多き江湖の中の名産として諸國を舟で得て孫
江州より出る産物甚ましく船中なる所の硯石伊吹文長渡り橋面
まに其名もし國を渡り渡地甲斐より出 栗津の船 舟山り船
水に矢根八箇の産産 栗津は當國 船 舟 舟 舟 舟 舟 舟
江州と名勝として宮の極布天下と重く 煙心のまきまき
るみなる小舟とらふとらふのこ

近松寺 近松寺 近松寺 近松寺 近松寺 近松寺 近松寺 近松寺 近松寺 近松寺

本堂十二間に面壁右三女寺の別所流るる湖を南茅八代蓮如
上人山門の坊難と遠流し一財三女寺の衆徒蓮師とかくまひ奉
とけ流る入村とせまきとせ流るこれと寄附せしとらふとぞ

